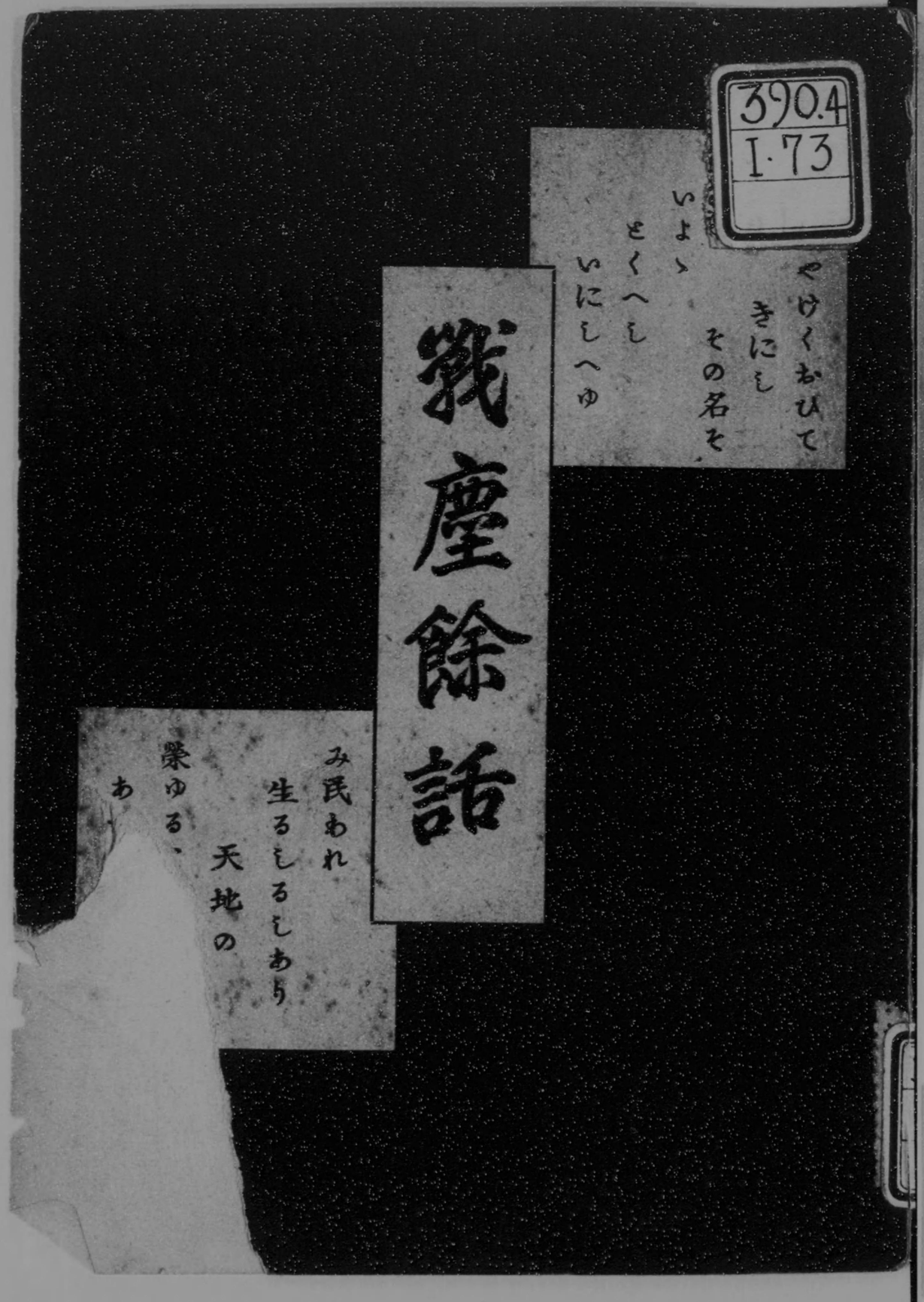

3

0055379000

0055379-000

３９０．４－Ｉ７３ウ

戰塵余話

石黒大介・著

清正堂書房

昭和１７

AJA

この著作物は、著作権者不明のため、著作権
第６７条の規定に基づき、平成１２年５月１
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの

390.4
I·73

戰塵餘話

四位中將 石黑大介著

清正堂書房

957
86

表紙

題字　著者揮毫

劔太刀の歌　大伴家持作

御民われの歌　海犬養岡麻呂作

萬葉集より

緒　言

大東亞戰の大詔が煥發せらるゝや一億同胞は決然として起ち上り、我に挑戰し來れる米英の前進根據地に疾風の如く迫る陸海軍と、腹帶を締め直した銃後の皇民とは、渾然一體となつて信に總力戰の實を擧げ、一日一日と、新しく强く且雄大なる歷史を書き綴つてゐる。

第一線の華々しい戰果、銃後の涙ぐましい努力、これを吾等は單なるニュースとして瞬間の感激に終らしては相濟まぬ、鮮血を以て彩られ膏汗を滴して造られたるこの事實の中に敎訓を感じ、手本を求め、自省自肅の栞となし、發奮興起の資となし、子弟訓育の糧として、益々傳統の大和心に磨きをかけ、難關突破の臍を固めねばならぬ。

戰塵餘話はかゝる意味から生れたのである。

古來「書を開いてはそのことを知り、書を閉ぢては自から考へよ」と諭えてゐる、行文が拙くして克くその意を盡さないが、切々たる微衷を紙外に汲みとらるゝれば、まことに幸甚とする所である。

昭和十七年明治節

著　者

『戰塵餘話』目次

一、戰　理……一
二、準備と訓練……四
三、常在戰場……七
四、無言微笑……一一
五、不說行持……一三
六、慕　直……一八
七、死……二三
八、死中活……二六
九、戰場即道場……二七
一〇、君が代……二九
一一、軍　旗……三四
一二、遺　骨……三八
一三、沒　我……三九
一四、熱時熱殺……四六
一五、忠　實……四九
一六、練　磨……五四
一七、深　慮……五八
一八、蔭武者……六〇
一九、師　匠……六四
二〇、奇　襲……六六
二一、難　事……七二
二二、必殺武器……七三
二三、國　語……七七
二四、議　事……八四
二五、慈　心……八八
二六、情　誼……九五
二七、克　己……九六
二八、自　守……九九
二九、門　出……一〇〇
三〇、赤き心……一〇五
三一、無名人柱……一一〇
三二、母……一一三
三三、一念不生……一一三
三四、おはつ……一一四
三五、人具一如……一一六
三六、親　切……一四〇
三七、開　眼……一四三
三八、革　新……一四六
三九、貯　蓄……一五〇
四〇、深　耕……一五四
四一、謀　畧……一五八
四二、贅　澤……一六一
四三、競　技……一六三
四四、享　樂……一六七

中華民國
外蒙古
滿洲國
印度
印度支那
東印度
海南島
ビルマ
タイ
ルーパネ
ベンガル湾
スラバヤ
ジャワ島
スマトラ島
ボルネオ島
セレベス島
ニューギニア
ハルピン
ハルバ
ハルカイ湖
クスンジウネジーニ
クスルヤノスラク
クスルビシオヴリ
ウルトゥマコタン
テンクー
コーインテンサ
ペッラダァグ島
ドンラドッペトーポ
ソトドル・フェン
スーパ
ポルネオ島
ハンドン
バンドン
セバラスロン
ハルバ
ルンパクリバ
ンバクリバ
ンガラ
ポンチャナ
ポンチャナ
ロトベンガ
ハルバ
ハルバ
ハルバ

大東亞戰爭詳圖

中華民國
古蒙外
滿洲國
日本海
日本
太平洋
印度洋
南洋
ヤリラトスーオ
大ヤリラトスーオ
海珊瑚
海タスマン
ニュージーランド
ハワイ諸島
日附変更線
ソヴィエト
ムチャッカ
オホーツク海
ベーリング海
ベーリング
アリューシャン
ミッドウェー
ウェーク
ギルバート諸島
マーシャル諸島
ソロモン諸島
ビスマルク諸島
ニューギニア
ボルネオ
スマトラ
ジャワ
セレベス
フィリピン群島
ビルマ
タイ
佛印
英領印度
蘭領印度
豪州
ニュージーランド
ハワイ
ミッドウェー
ウェーク
グアム
ラバウル
ポートモレスビー
ダーウィン
シドニー
メルボルン
アデレード
パース
ブリスベン
ダンスビル
ウィンダム
ポートダーウィン
ポートブレア
ラングーン
マンダレー
ラングーン
バンコック
サイゴン
シンガポール
ジャカルタ
スラバヤ
バリクパパン
マカッサル
マニラ
ダバオ
ジャワ海
スラバヤ
ウラジオストック
ハバロフスク
ペトロパブロフスク
アリューシャン
ダッチハーバー
ホノルル
パールハーバー

戰塵餘話

石黒大介

一、戰理

大東亞共榮圈策立のための大東亞戰は、今日始まつたものではない。已に支那事變がそれであるのみならず、又滿洲事變がそれであり、日露戰爭がそれであり、日清戰爭も之に加はるのである、英國の歷史家アダム、ギボン氏は「日清戰爭を世界の人が、——日本に於てすら——清朝と日本との戰だと云ふのは正しくない、あれは、西洋的な東洋の支配力が、亞細亞に生れた日本に反擊されたのである」と、云ふてゐる。

更に遡れば、明治維新當時の尊皇攘夷に及ばねばならぬ、水戸の會澤安は、その著、新論に於て「大に敵愾の師を興し、天神の糧を食ひ、天神の兵を揮ひ、天神の仁に仗り、其威を奮ひ、以て天下を方行し、狹きものは之を廣からしめ、險しきものは之を平かにし、神武不殺の威を以て、殊方絶域に震はゞ、則ち海外の諸蕃をして、來りて德輝を觀せしめんと欲す、亦た何ぞ屑々としてその邊を伺ひ、民を誘ふを之れ患へん」と壯語し、又「文を揆り、武を奮ひ、四表に光被し、以て其耿光を覩し、その大烈を揭ぐるは、仁人の業なり」と言ひ、更に「皇化の廣く及びて四表の國にまでも被らんことは、天照太神の神意にも愜はせ給ふ故なるべし」と極言してゐる、即ち攘夷は邊境來襲の白人を排他し排撃するが如き、屑々たる理念にあらず、武畧と共に仁政を普く施さんとするものであつて、侵畧ではない、悠遠、雄大なる皇謨を宣布するものであることを知らねばならぬ。

尙廸彝篇には「他日、皇化益々闡けたらんには、大地の形によりて其名をも、天朝より賜はるべきなれば、今姑らく其の總稱の名を闕きて、西蕃、北狄、南蠻、遠西、或は西荒等の字面を用ふるも可なるべし」と云ふてゐる、何んと雄渾なる考えではないか。現にシンガポールは昭南島に、蘭印は東印度等にこの豫言が着々と進渉しつゝあるは、信に快事である、明治維新の志士は泉下に微笑して自悦してゐることゝ思ふ。

更に遠く遡れば、神武天皇が建國の肇めに「八紘を掩ふて宇となさん」と宣ひ、し大詔に歸納せねばならぬ、今上陛下の詔にも或は「萬邦共榮の樂を偕にせん」と宣ひ或は「萬邦をして各々其所を得せしめん」と宣はせられてゐる。即ち大東亞戰は、畏くも皇祖の御遺訓を恭しく承繼し、且つ之を恢弘する聖戰である。

攻畧も、戡定も、建設も、この聖旨と理念とに基いて行はれつゝあるのである。

二、準備と訓練

大東亞戰の詔が煥發せらるゝや疾風、迅雷の如く空に、海に、陸に、赫々たる戰果が相次いてあげられ、國を擧げて驚歎し感激と感謝とに充たされた。

抑々この戰果は、畏くも御稜威によるものであるが、陸海軍の周到なる準備と、眞摯なる訓練の結果に外ならない。

想へば今を隔ること二十有餘年前、世界第一次戰爭後、我が國運の駸々たる進展は、世界の注視する所となつて、米英は華府會議を催して我を抑壓せんとし、永き日英同盟の好みは弊履の如く破棄せられ、我が艨艟を劣勢比率に強制し、剩さへ九箇國條約を強いて我が國の大陸進出を阻止し、又滿洲に於ては皇國の事業を牽制抑壓し、偶々關東大震災起りて國力の頓に低下するや、之を機として移民法の改正を行ひ「犬と日本人は入るべからず」との侮辱を加えた。

陸海軍は是に於て深く期する所があつた、即ち來るべき戰の準備が着々として始められ、訓練は益々その精度を加えられた。

航空隊の擴充、航空機材の整備、改良、機械化兵團の裝備擴充、科學戰の研究、南方兵要地學の再檢討、南方作戰の策案、陸海軍協同討議、曰く何、曰く何と、統帥部は、米英の謀略に陷つて平和熱にかぶれ小成に安んじ、榮華に醉える時代の頽風をよそに、超然、巍然として默々と精進した。

訓練にあつては、海軍は量を質にて補はんがため、或は熾烈なる夜戰を練りて三保ヶ崎の慘事を生み、或は洋上の飛翔により母艦に還らざる悲劇もあり、或は潛水艦の尊き犧牲があるなど、幾多の苦難に遭遇しつゝ志氣益々昂りて一意奉公の途を驀進した、月、月、火、水、木、金、金の苦行は、已に二十年前より航空部隊の勇士間に言ひ傳えてゐる聞きぶるした言葉であるのだ。

陸軍にありても、或は夜戰、夜行軍、上陸作戰の演習を瀕々と行ひ、特に臺灣

に於ては熱地作戦の體驗を襲ぬるなど、曰く何、曰く何と、ひたすらに一朝事あるときに備えつゝあつたのである。

「遺恨十年一劍を磨く」といふ古詩の句があるが、遺恨二十年の間、寸刻の弛みもなく一劍を磨いたのである、その劍の切れ味のさえてゐるのも最といはねばならぬ。

この用意と訓練とは、世界周知の事實であつて、同盟側も敵側も、共に之を認識してゐる。

即ち獨逸のアルゲマイネ・ツアイツングは「日本軍の立派な勝利は、周到なる準備と、猛烈なる訓練のたまものである」と絶讃し、U・P・記者である英のハロルド、ノカードも「日本軍の作戦は戦前にあらゆる用意を完了して開始された」と報じ、アルゼンチンの海軍M大佐は「實現せられた日本海軍の威容は、正しく亞細亞の波荒き洋上にふさわしいものであることを證明した、日本の建

艦技術の優秀さと、兵員の訓練の素晴しさは、日本軍の自己犧牲の尊き精神と共に今や明白にされた」と。

なほこの外にも新聞に雜誌に、同じ意味の稱嘆が數限りなくあるのである。準備と訓練とは、有事の日のためにのみ緊要であるばかりではない、吾等の日常の仕事も、生活も、亦たこのやうに周到で且つ眞劍であらねばならぬ。

三、常在戰場

紀元二千六百年式典のとき、文武の顯官は參列の光榮に浴し、態々地方より上京するもの夥しく、汽車も旅館も滿員であつた、この間にありて、顯職にありながら參列を辭退して御聽許を得た異例がある、それは聯合艦隊司令長官山本五十六大將である、大將は「常に戰場に在り」の不動の信念から、大典と雖も

己が職場を離るゝに忍びなかつたのであらふ、陛下より艱艟を御委託になり、之を指揮する身は之より離るゝに忍びなかつたのであらふ。

立派なる心構である、いつも眞劍な心構である。

想ひ起せば日露の役、戰機まさに迫れる二月八日、旅順にあつた露國東洋艦隊の將校連は、いづれも陸上にありて美酒と舞踊に夜を更しておつたとき、我が東鄕艦隊の奇襲の一擊に、港外の軍艦は手痛き損害を蒙たのである、油斷ではない、不覺である。

又大東亞戰の劈頭、太平洋の風雲漸く急にして大雨將に臻らんとする際、布哇眞珠軍港にては米本國よりは十二月六日に警告ありしに拘らず、八日は偶々日曜日なりしと、前日暴風雨ありしがためか、司令官キンメル以下多くの將兵は陸上に甘夢をむさぼれる朝まだき、我が荒鷲と潛航艇の急襲を受け、その艦隊及航空機は殆んど全滅せられ、且陸上諸施設を破壞せられ、二十年前ワシン

トン會議に於て我國に强制せし五、五、三の海軍力の比率は、一朝にして空文化した。

東西將兵の心構に於て、雲壤の差異あることを知ることができる。

又軍艦に觀るも、皇國海軍は、裝備を主として兵員は其の虛隙に辛ふじて起居するに拘らず、米國軍艦にありては、士官室などは豪華な「ホテル」のやうに贅を盡し、娛樂具はすべて整ひ、ダンス場もあり、訓練は二の次であつて、洋上の生活を樂むための設備に力が注がれてゐる、沿岸回航のときには、行く先々へ妻を先廻りさせて、寄港地では僅かの間でも夫婦生活を樂んでゐた。

此度帝國の艦籍に入り唐津と命名せられた米艦「ルソン」號についてある造船中佐は語つてゐる、「享樂設備は整つてゐるが、性能の點では日本に比べて全く問題にならぬ」と。

又水兵の募集には「芭蕉の木の下でシガーをくはへる氣分を味へ、世界を廻る

機會は今だ、俸給も十分で自分の入費は一切いらぬ、さあ海軍に入れ」と宣傳してゐる。

このやうな將校と、この心持から出て來てゐる水兵より成るのが、米國の海軍である。

又昭南島に殘つてゐた英國の兵隊募集には、「軍隊に來れ」と大書して、次に軍隊では(一)よい食事、(二)よい月給、(三)住宅は快適、(四)樂しいスポーツ等の效能書がならべてあつたといふことである。

個人主義、自個中心主義、自利主義の英米の心持が、あり〳〵と顯現せられてゐるではないか。

之に反し家を出づるとき「我家のことを懷ふなよ、死んでこい」と勵まされて門出する皇軍の將兵、「海ゆかば水づく屍、山ゆかば草むす屍、大君の邊にこそ死なめ、かへり見はせじ」と、千年以前よりうたい繼ぎ、言ひ繼だ皇軍の將

士と較ぶるとき、皇軍の神々しさが一段と加はるのを覺える。

このやうな立派な軍隊が、世界のいづこにあろふか、自惚れてはならぬが、心の奥に矜持を感せずにはゐられない。

然してこれを益々長養して幾年後も、今より退化しないやうに益々增强するやうに、心懸ねばならぬ、こゝに皇民練成の要が益々痛切に感せられるのである。

四、無言微笑

昭和十六年十二月八日、布哇眞珠軍港米艦隊强襲の命を受けた特別攻撃隊の九勇士の一人、橫山薰範兵曹は、出發に方り酒好きの戰友某兵曹が「大戰果をあげて還てくれ、その時は大いに飮まうぜ」と肩を叩て勵ましたとき、橫山兵曹

は、只莞爾と笑つただけで何も應へなかつた。
後で判つたが兵曹は、身の廻りを整然と處理し、上官や同胞に謝恩の言を殘し
たのみで、遺言も辭世もなかつた。
遺言もなく、辭世もなく、只是れ微笑!!
なんと奥床しく又千萬無量の味があるではないか。任務を帶んで生還を期せざ
る境地に突入するに方り、死生巖頭、何等の屈托もなく、何等の執着もなく、
何等の衒氣もなく、何等の誇示もなく、況んや何等の期待もなく、悠々として
逼らず、淡々として我を忘るゝ心境は、洵に尊いではないか。
默々として只々微笑して征くのは、言あげせぬ雄々しい大和益良夫の心根であ
る、聖者の姿ともいふべきであると思ふ。
若年の人に已にこの悟あり、世の有髯の人、半白の人、猶且つ悟を求めて或は
禪に心身を勞し或は參禪して公案に迷ふものがある、當にこの壯夫に慙づべき

である。

附記

横山兵曹は鳥取縣の人、吳海兵團にて教養せられた、賜暇、歸省する毎
に、必ず鍬を把つて兩親を輔け耕耘に從つた、温順、謙虚な孝子でもあつ
た。
この孝子にしてこの忠烈あり、まことに偶然ではないと思ふ。

五、不說行持

三宅海軍報道班員の談に「私の苦心談といふのは、今までと違つて文章を上手
に書くといふよりも、何とかして實感を傳へたいといふことが念願でした、と
ころが海軍の兵隊さんは一寸も云はない、例へばウエーキなど相當激烈な戰鬪

をやりながら、淡々と語つてどうも實感が出て來ないし、尋ねても「大したことはありません」と至極簡單に片附てしまふ、またニューギニヤで敵航空母艦をやつつけたときも、戰友が死んだといふことばかりを氣にされて、一寸とも興奮したやうな話をしてくれない、私が從軍を通じて感じたことは、海軍の人が少しも興奮せず、記事が書けないのには一番苦勞した、上の人も實に簡單に話す、モレスビー第一回爆撃の時、隊長の大尉に聽いても「別に大した戰果はないよ」といふ、地上砲火もあつたが、まるで訓練にでも行て來たやうなことをいふ、これにはホト〳〵弱つた。

又山岡報道班員の言に「潜水艦が任務を終へて基地に歸つて來ると、乘員は非常に疲れて上つて來る、これに戰果は如何ですかとは、どうしても云へない、無理に尋ねると「何もなかつたよ」と云はれる、全くとりつく島がない、非常に奥床しいですが、それでは記事がとれない。」之に對する情報部の富永少佐

の答は「自分の任務遂行と云ふことだけですから、それは當りまへのことをしたに過ぎない、それに尾鰭をつけるとか、少しでも自分がよく働いたといふやうな顏はしない、これは海軍の傳統と申しますか」と。

一番乘とか、拔け駈けの功名をしないのは、海軍の傳統である、尊いことである、各々が受持々々の仕事を眞面目に一生懸命に完遂するのが、やがて總力を有功に發揮することになり、全勝を博する所以である。

「海軍には個人の手柄はないはずだ」と海軍の人は云ふておる。

爲すべき事を爲し、盡すべき事を全力を擧げて盡せば、それで自己の滿足が得らるゝ、人に知らせるが爲にするのでもなければ、又人に知られんが爲めにするのでもない、そんな不純なけちな心情は寸毫もない、只一途に　大君のために心身の全力を捧げて努力し、死して悔なき心境が軍人の信條である、夫れを何の語ることがあろふや、海軍々人の默々たる行持はまことに崇むべきものと

思ふ。

世の中では、協同一致と云ふことをはき違えて考えてゐる人が多い、協同一致と云ふことは、同じ方向にむかつて銘々がその本務を忠實に竭くすことである。

人の世話をやいたり、人の仕事に干渉したり、手出をしては協同は成り立たぬ、それは混亂である、自分の本務を十分に能く盡さずに、人の事に容喙するのは協同でなくて、いらぬ干渉である、又反對に自分の仕事に全力を盡さないで、人の援助を期待する人もある、之は人としては恥辱である。

職域奉公の尊さが即ち是である、昔プラトウの言に「總ての人が、總ての事をする必要はない」といふておる、一人で何でもかでも、することは出來ないし、又する必要もないのである、銘々は、その立場々々で眞劍味を以て其の仕事をすればよい、かくすることが協同一致である、心持さえ同じ方角を指して

おればよいのだ。

陸軍の前の要務令に「一般の目的と任務とに稽へ、專ら心力を職責の存する所に竭し、他の補助に倚賴することなく、毅然として其任務を全ふすることに努むべし、此の如くにして後、全軍の協同一致得て期すべきなり」と諭してある。

一定の作戰計畫に基て、歩兵は歩兵のことを立派に仕遂げればよい、それを歩兵が砲兵のことや、工兵のことまで干渉しては軍秩は亂脈になる、又みだりに助太刀を望むのも他の力を殺ぐことになつて全體としては却て不利である、生死の關頭より出た尊い教えである、一般の世の中の人は克く之を味はねばならぬ。

又世の中には、自分の爲したことを吹聽して、針ほどの事を棒のやうに誇張したり、人に見せやう、人に知られやうと焦り燥ぐものゝ多いのは、情けない

ことである、例へば昔から神佛へは人の知らぬ間に詣りて我が眞心を捧げるのを、今は旗を樹てたりして業々しく詣るものもあれば、なるべく人に目立つやうにして詣るものもある、又神佛に寄進や、献納をするには、自分の名の出るのを謹しみ畏れたものであるのに、今は業々しく張出して貰つたり、又は新聞紙などに書いて貰ふやうに仕向けるものもある、不純である、眞の信心とは認められない。

太陽は日々默々として輝きて萬物に惠を與へ、月も亦た、默々として闇を照して明るさを我等に惠んでゐる、不說行持即ち不言實行の尊き示現である、相互に我身の行を顧みて、日月に愧ぢないやうにしたいと思ふ。

六、驀　直

末次海軍大將の話に「狂瀾怒濤の眞只中では、舵は常に風に眞直に向いておかなければならない、之を避けやうと船を横に向ければ、ひつくり返るものだ」と。

苦しい境地、危い境地に臨んでは、躲避するよりも驀進することに利がある、千慮を截斷し、萬感を拂盡して、純一無雜に直進するにある、敵の精神が弱ければ、むかふの方が必ず避けるのである、こちらから先に避ける必要はない、これが達する方法であり、活きる道である。

兵法の極意もこれである。

曩に天聽に達した空の花形、陸の荒鷲「隼」部隊長、加藤健夫中佐の武者振を、齋藤特派員が誌せし一節に云ふ。

「緒戰に於ける制空權は、わが加藤部隊の猛攻によつて作られたのだ、加藤部隊長は進むことより外を知らないやうな人だつた、どんな自然の障壁もその前

進の決意を止めることは出來なかつた、たゞひた押に押して遮二無二突き込んで行く、恐ろしいほどの戰闘への情熱はマレーからスマトラへ、そしてジャバへと伸びて、南方に巢くつた敵機の擊墜は、實に二百數十機、完全に惡魔の翼を叩き伏せ、日の丸に輝く平和の南方航空圈を建設したのだつた」

はて知らぬ南方の積亂雲は、その雲頂實に七千米にも達し、その雲脚は海面を匐ふてゐたであらふ、また豪壯なスコールは、石のやうな大粒の雨となつて空中分解をも起しそふな劇しさであつたであらふ、この暗雲と豪雨の中へ、驀直に部隊長機を先頭にして突込んで行く戰鬪機群の勇猛果敢な姿は、人業を超越したる魂の神業である、只敵を求め敵を屠らんとする精忠無比の魂の飛翔である。

又た米爆擊機を追跡中のある日本の戰鬪機は、操縱士の姿が見えなくなつてなほ追跡をつゞけ、その血だらけの機體を見たとき「こんな奇蹟は生れてみたことがない」と米人操縱士は震えながら語つてゐたといふことである。

雨のやうに注ぎ、嵐のやうにすさまじい彈の中を、白刃を振りかざして敵陣へ斬込むのも同じ心境である。

只驀直に前進あるのみである、遲疑を許さず、逡巡を許さないのである。

フイリツピン作戰に於て、ある橋梁に燃ゆる自動車を殘置して退却せし敵を追迫する我鐵牛部隊は、敢然突進し體當を以て燃ゆる自動車を河中に突落して橋梁を安全に確保したといふ話もある。

又ビルマ作戰に於てラシオに向つて突進せし快速部隊は、軍當面の支那軍は、道路及び橋梁を破壞して退却したのであるが、皇軍は燃えつゝある木橋を自動車で强行通過し、橋の落ちるまでには一輛でも二輛でも、前岸に進出するといふ、猛烈な追擊を實施した。

驀進により活路を拓いたよい實例である。

又マレー作戦ジットラ戰闘に於て、佐伯部隊の戰車隊は、十二月十一日、チヤンルンの敵陣地突破後、折からの大雷雨に乘じ、敵が猛雨に困憊しあるを知るや敢然驀進して敵機械化部隊を急襲蹂躙し、敵と味方と團子になりつゝ深く突入し、敵をして道路や橋梁を破壞する遑を與えず、徹宵遮二無二に突進直入して敵堅陣瓦解の端緒を開き、緒戰に於て敵の心膽を寒からしめた。

驀進なるかな、驀進なるかな、機を捉え機に乘ずる驀進は、實に運命を拓くの鍵であり、活きる途であり、成功に導くの手段である、確乎たる信念の下に驀進する前途には何物をも之を阻み之を遮ることはできないのである。

七、死

高橋海軍大將の話に『ある司令官が、部下の若い將校を、戰闘機から偵察機

に配屬を變へた、ところが、その將校は偵察機などに乘るのを喜ばない、司令官が「配屬をかへたのは、將來のためだ、今に飛行隊長にもなるし、航空母艦の艦長にもなる、司令官にもなる、さういふ風に出世して行くためだ」と諭してなだめると、その將校は「私はそんなことは考へてゐない、司令官は、私がそんなに出世するまで生きてゐると思つて居らるゝのですか」といはれてポンとやられた、實に偉い、死ぬ氣でやつてゐる、將來の立身出世などゝいふことは考へて居らぬ』と。

直面する己が任務に精魂をうち込んで純忠無雜、榮達を望まず、聲譽を欲せず、いはゆる求むる所もなければ又着する所もない、若武者の神々しい逞しい心構は、何と尊く又儉（ツヽマ）やかなことである、かくてこそ振古未曾有の戰果が擧げられつゝあるのである。

マレー沖海戰に方り、十二月十日、我が潛水艦より敵艦隊發見の飛報に接し、

勇躍之が攻撃に向ひし某大尉の手記に云ふ。

『全員整列、薄明の基地で出撃の訓示をする司令の眼は、決意と緊張でギラギラ光てゐる、「千載一遇の好機である、全力を盡してやれ、みんな死んで歸るのだ」「はい死んで歸ります」司令の訓辭に答へるやうに、極めて自然に、全員のまなざしがかう答へた、少しの不自然もなかつた、この時ほど容易に當然に思へたことはなかつた』と。

又戰鬪の一節に云ふ『轟然「レバルス」の後尾に水柱があがつた、二番機が火達磨となつて自爆したのと同時に、同機の放つた魚雷が「レバルス」の眞中に命中、二本目の水柱があがつた、つゞいて艦首すれ〳〵に眞紅な火焰が一條の煙幕のやうな帶をひいて走つた、三番機が自爆したのだ。

「おのれッ」一瞬、皆の胸に怒に近い感情がこみあげて來た、だが、それは直ぐに消えて「立派だ、見事な最後だ」といふ感歎に變つてゐた。

「こんな美しい死方ができれば、それでよいのだ」誰の胸にも不思議に同じ氣持が動いて居た』と。

何といふ壯烈な、何といふ立派な心持であろふ。

敵を惡むよりは、友の雄々しい最後を羨む心こそ、信に我皇國傳統の武士道の精華である。

伊太利のムッソリニーは『百年生きるよりも、一日の光榮に死ね』と軍人に諭してゐるが、皇軍將兵の死は玉と碎けるばかりではない、もつと崇高な理念に基てゐる。

英のミルズは『いかに死すべきかを學ぶには日本人の所へ來なければならぬ』といふてゐる。

八、死中活

我が貨客船辰鳳丸が、任務を終えて某月某日、内地へ向けて太平洋を一路航行中のある日、午後六時頃、見張員が左舷一千五百米許の波間に潜水艦を發見した、米國の潜水艦が、本國に歸るがため東航中のものらしい、わが船を見るや、直ちに魚雷を發射した、魚雷は夜の海上に白い波を蹴立てゝ逼つて來た、之を巧みに右舷にかわしながら、同船は全速力をあげて潜水艦に向け突進した、之を見た敵潜水艦は慌てゝ潜航に移らんとしたが、辰鳳丸は速くも之に迫り、艦橋の一部を殘してまさに波まんとする上を見事に乘切つた、このとき辰鳳丸の船底は潜水艦の潜望鏡が、艦橋の一部を破壞したらしく、ガバーンといふけたゝましい響を感じた。

武裝なき丸腰の辰鳳丸は、見事に潜水艦に體當を以て撃沈したのである、この間僅かに四、五分のできごとであつた。

辰鳳丸は「後の先」であつて、敵潜水艦は遂に「先の後」となつた、又皮を切らして相手の骨を斷つ、我兵法の極意そのまゝであつて、攻勢は敵に勝つ唯一の手段であり、又死中に活を得る唯一の途である。

九、戰場即道場

比島戰中、バタンの敵の堅壘を攻撃に赴きし、陸の荒鷲の手記の中に、左の一節があつた。

「バタン半島東部は燃えて火焔は地獄の如し、戰果は豫想外に進展す、意義深き大東亞戰に參加し、こゝに戰場を飛翔す、尊い修養の天地なり」と。

生死を堵したる戰場を、修養の天地と思ふのは、實に天晴れな、見上げた心構と思ふ、修養の深淺は、生死關頭に出入して始めてよく判るのである、こんな眞劍な道場はない、人は立場々々を即道場と心得ねばならぬ、修養は靜寂な所で行はるゝのでなく、このやうな動的の實際の修練を積でこそ、人格が益々磨きあげられ、識能が益々向上するのである。

又ある飛行少尉はこう云ふておる。

「たとひ私がいつ死んでも、父や母は日本に強く生きてゐる、日本の國は永遠に榮えて行く、さう信ずると 私は 國土に對する搖ぎなき信賴感が胸に昂まつて、どんな激戰にも彈ぶすまの中へも、喜んで突き進んで行くのです。日本に生を享けた喜のまへに、いさゝかの怖もなく戰ふのです」と。

生死を蟬脫するのは修養の極致である、生死の外に優遊してこそ眞に人格に光輝を帶ふるのである、それにはある信念が必要である、飛行將校のこの信念も

亦その一ツである、銃後の人々はこの氣持を能く察せねばならぬと思ふ。

一〇、君が代

フイリツピンのバタン半島の天嶮に據る米軍を擊滅せんがため、四月七日、サマット島東南方の敵陣地を攻略せんと、樋上隆太郎中尉は、一隊を率ゐて尖兵中隊となり先行した、同地は大ジャングル地帶でもあり、且絶壁が屹立してゐて、敵は機銃、迫擊砲、手榴彈を以て頑强に抵抗した、我將兵は密林を潛り人梯を攀ぢ、ロック、ライミングをして敵陣に迫り、激戰力鬪、二時間の後ち、三度までも突擊を敢行して遂に之を擊退した。

そして敵の遺棄せし武器や、敵屍の累々たる陣地内にてホツト一息したとき、餘り大きな聲ではないが、力を籠めて「君が代」を奉唱してゐるのが微かに聞

えて來た。

樋上中尉は、フト耳を欹てて、聲のする所に行つてみると、部下の喇叭手三村役上等兵が、胸部に敵彈を受けて鮮血に染まりて倒れながら、最後の息の下で奉唱してゐるのであつた。

この嚴肅な、しかも敬虔な光景に中尉は感激して、附近に居合せた戰友を呼び集め、手當をしたが、三村役上等兵は、朝陽が東天に昇るころ「君が代」を全部奉唱し終つて靜かに息は絶えた。

一死君國に我命を捧ぐる刹那、「君が代」を吟じつゝ從容として散り行く若人の最後は、悲壯でもあり、また壯嚴でもある、眞に純誠なる信念の聲である。

又ダツチハーバー軍港を强襲せし海の荒鷲の一隊は、任務を終えて歸るとき、一機がおくれて夕闇迫る洋上より「お許し下さい、燃料あと十分間」との無電

を發信し、間もなく「天皇陛下萬歲」の受信を最後に、無電は杜絶した、この一機はついに母艦に歸らなかつた。

抑々死に臨んで叫ぶ「天皇陛下萬歲」は、純情なものでなければ出ない聲であると思ふ、不純な心情のものが、どうしてこの聲を出すことができやう。

相互に世間の實況を明視してみやう、重恩を蒙り殊遇を辱ふせし重臣又は名士でありながら、子孫のために遺言する人はあつても果して幾人が　陛下の萬歲を叫んだか、吾は寡聞にして未だ之を知らない、又疊の上で安樂に往生を遂げることのできるのは、畢竟皇民のありがたさである、しかるに皇民の幾人が、果して臨終に方りて、この語を發するものがあるか、念佛をすゝめる家族はあつても、陛下の萬歲を奬める近親はあるのか、吾等は、あまりにも皇澤に馴れすぎてゐはしないか。

省みて相互も、死に直面して克く之を叫ぶ自信があるか、確信があるか、胸に

手をあてゝ我と我心に聞いてみる必要がある。

皇國の臣民としては戰場と銃後とを問はず、戰時なると平時なるとを問はず、純一無雜に、萬事を天皇に歸一し奉り、ひたすら聖壽の萬歲を祈念せねばならぬ、是が大和心であり、日本精神である。

萬邦にたぐひなき、我がすめら御國の姿であると思ふ。

附記

上古よりの文獻をたどつてみるのに、皇民が純情をそのまゝ詠じた歌のごときは、いづれも「大君のため」といふてゐる。

古來、人口に噲炙してゐる「海ゆかば」の大伴道臣命の歌、「山はさけ」の源實朝の歌、さては「君のため」の宗良親王の御歌、いづれも皆ひたすらに大君のためである。

「國家のため」といふ思想や用語は、支那から輸入せられたものである、

國家とは一定の域内にある民族の集團であつて支那には國家はあるが、萬世一系の仁慈なる大君はおはしまさぬ。

また皇國には「祖國」などはあり得ない、外國にはそれぞれの祖國があるかもしれぬ、又「父母の國」といふ外國語を祖國といふのかもしれぬが、皇國は天皇の御國であり、吾等は天孫民族であり、すめら御民であり、臣民であるのだ、皇民には斷じて祖國はない。

こうゆう用語も克く辨えて用ゐないやうにするのが、即ち「國體明徵」するゆえんである。

皇民は、ひたむきに、大君のためであらねばならぬ、聲高らかと心から「君が代」を奉唱しやうではないか、たゞに奉唱するばかりでなく何もかも上御一人に捧げ奉らうではないか。

二、軍　旗

昭和十七年一月十三日、マレー戰に於て、クアル、ルムプール占領直後の光景を報道したるうちに、左の記事があつた。

「街の中央の橋の附近を通過すると、和服を着た五人連れの日本婦人が、赤ちやんを背中に負ふて、群がる住民を掻きわけるやうにして、肅々と進で行く軍旗を伏し拜みながら、眼には一杯の涙を湛え、はつきりした日本語で萬歲を叫んでゐる、それは英軍に拉致せられた婦人ばかりだそうだ、迎へられた兵隊さんも、同胞の姿を見てホロリとしながら前線へ前線へと進んで行つた」

なんといふ感激の深い情景であろふ、一幅の畵にのこしたいやうな場面である。

又某潛水艦の勇士の詠じた左の歌がある。

赤道をこえて　はるかにあおぎみる
君か御旗に　涙うるめり

眞劍な氣分は眞劍なる場面に表現せられるものである、しかし、それではならない、眞劍ならざるやうな場合にても、常に眞劍味が溢れてゐなければならない。

日常、軍旗に對しても、このやうに心から敬意を捧ぐるやうにしたいものである。

まして、鄕土部隊の軍旗には、數度の戰役に方つて我が鄕土人の忠誠の魂が、この軍旗に集中せられ、そして尊き鄕土人の鮮血が、この下にて濺がれたことを想起せねばならぬ。

たゞに景仰し、尊崇するばかりでなく、靖國神社や忠靈塔の前に脫帽して合掌する氣持を以て、この軍旗を仰がねばならぬ。

附記

事變このかた、國旗がよく動きいだした。新作戰地の南方へ行くと、各國共にその植民地には至る所に國旗掲揚桿があつて、日々住民に國旗を仰がしめてゐる、例へばフイリツピンはアメリカの國旗であつて、國旗を掲げつゝアメリカの國歌を合唱させておつた、今頃は日の丸の御旗が高く掲げられてゐることゝ想ふ。

これは無智の住民に對する統治上の一手段であるが、元來國旗は、國の行事にのみ、恭しく掲げらるべきものであつて、例へば四大節とか、國家的の祝祭日とか、紀念日とか、苟も國全般に關するときでなければならない。

それが近頃は、私のことにまで、やゝ濫用されてはゐないか、これは國旗の本質と尊嚴とに鑑みて、當路者及指導者は、よく考えなくてはならぬと

思ふ。

又事變以來出征軍人のため、國旗にいろ〳〵なことを書いたり、署名することが流行してきた、これは最も愼むべきことであつて、神聖なる國旗を冒瀆することになる、まして各人の自慢や見榮のために、名士などを煩すに至つては、それは「虚榮」のために、尊き國旗を惡用することになつて、罪はまさに萬死に値するのである。

各家庭に於ても國旗は別の棚に上げておくか、別の清淨なる箱に容れて格納せねばならぬ、風呂敷などと一所に抽出などに入れて置くべき性質のものではないのである。

もつと相互に國旗を尊重する觀念を高揚し、習性を涵養したいと思ふ。

一二、遺　骨

戰友の遺骨を胸に吊し、銃劍を小脇に抱えて嚴然と歩哨に立つてゐる兵の寫眞を見て、優に床しき皇ら益良夫の神々しい姿に、無限の感慨を禁ずることができなかつた。

俱に死なんと誓つたことを悔むが如き心根と、勝閧の悦を頒たんと期する氣持とが交錯して、あり〳〵と想像せらるる、皇軍將兵にのみ見られる、うるわしい圖である。

「遺骨を抱いて」と題する戰地にある一軍人の歌がある、

一番乘をやるんだと　力んで死んだ戰友の
遺骨を抱て今はいる　シンガポールの朝の街
男だなんで泣くものか　噛んでこらえた感激も

山から起る萬歳に　思はず頬が濡れてくる

（下略）

この歌を讀んで泣かないものがあろふか、泣くのはたゞに戰友ばかりではない、一億の同胞はみな袖を絞るであろふ。

しかし單に哀愁啼哭するのは、遺骨に對する禮ではない、戰友に抱かれながら堂々と入城した遺骨である、吾等は時局の艱苦を突破して戰爭の目的を貫徹するのが即ち遺骨に對する禮である。

一三、沒　我

三月三日スマトラ島に上陸を企つる陸軍部隊は、御用船に乘り込み作戰基地を出帆した、海は荒れて船は木の葉のやうに搖れた、同日午後二時過、突然船內

から耳をつんざく爆音が轟き渡つた、船がやられたのだ、どこからともなく悲痛な叫び聲が起つた、非常警報が鳴り渡つた、このまゝでは將兵は船もろ共に海の藻屑となる「全員救命具をつけ、海中に飛び込め」輸送指揮官の嚴然たる命令に、武裝したまゝ兵は、波高き海をめがけて一齊に飛び込んだ。

「勝手に離れてはいかんぞ、小隊は小隊、分隊は分隊で一緒に纏まれ」と指揮官は叫ぶ、兵は戰友の名を呼び姿を求めて波間に漂つた、船は間もなく轟然たる爆音と共に海中深く沒して行つた。

かくて約三時間の後、急を聞いて軍艦が遭難現場に到着し、カッターを卸して救助にかゝつた、逆巻く黒い波に揉まれながら兵はカッター目指して泳ぎついた、みれば兵はいづれもしつかと銃を握り締めたまゝではないか、カッターよりは繩を放ちて「さあ早く摑まれ」と呼ぶに「いや俺は後でよい、分隊長殿から先へ」と蒼ざめた兵は云ふ、傍に泳いでゐる分隊長は「俺はまだ元氣だ、貴

様はもう弱つてゐる、早く上げて貰へ」と波をかぶりながら待つてゐる。

分隊長は部下を先へ、兵は上官を先へ、相互に譲り合ふうるわしい光景に、救助の水兵はみな感激の涙を流してゐる。

かくて一時間の後、遭難の陸兵は一人殘らず救助せられた、艦内にては溫き風呂や、衣服や、食料が準備せられて「ありがとう」「濟みません」「いや君等の落着き拂つた態度には感激したぞ」と、陸の勇士と海の勇士の溫い握手が艦上至る所に展開された、數日後この軍艦が基地に還つたとき、寺内大將は態々軍艦を訪づれて海の勇士に感謝された。

荒海に死の漂流をなしつゝ、猶武器をしつかと握り締める勇士、救助に方りて先づ戰友に譲る勇士、何とうるわしく賴母しい話ではないか、皇軍の魂、皇軍の姿が如實に現はれてゐる。

（荒尾海軍報道班員手記）

又こんな話もある、ジヤバ島上陸作戰のとき、我が輸送船團は泊地に於て敵艦

隊の襲ふところとなり、敵彈命中し沈沒せんとする船より海に飛び込んだ軍參謀の談に「ようやく舟艇に泳ぎ着くことができた、艇内の兵に扶けられて舟艇内に入つた、私は睡氣を催したが、兵はなほ口々に自分の分隊や、班長や中隊長の名を戰友の名を呼んでゐる、隣の舟艇に向つて「〇〇殿を救てあげて下さい」と呼でゐるものがある、艇内の薄明りで、自分の戰友の助かつた姿を發見して、互に相擁して嬉し泣に泣てゐる情景を見て涙が止め得なかつた。

私は、今夜この海中と、艇内の情景を眼のあたり體驗して、日本軍隊の強い要素をあり〳〵と感じた、生死の際に立つても、日本の兵は自分の上官を、戰友の身の上を、念頭から離さない、高級指揮官まで、兵士達と苦樂はおろか、生死を共にする一方、部下は我身をかまわず指揮官をかばふ、鐵の如き團結、しかも軍司令官から兵までの血の中には「大元帥陛下の御ため」といふ、堅い信念以外にない、世界中どこの國へ行つてもかくの如き軍隊は斷じてない」と。

又南方洋上ボルネオ、クチン攻略のとき、我が驅逐艦の沈沒した時のことである、艦影が惜しくも波間に消え去つた後、將兵は月光に照る眞黒な重油に染まりながら、互に勵まし合ふて泳てゐると、一人の水兵が直ぐ前方に、救命具を持た士官の姿を認めた、「大丈夫ですか」水兵が聲をかけると、士官が「お前こそ大丈夫か、怪我はないか」と、水兵を氣遣ふ「私は元氣です、大丈夫です」と、水兵は答へながら勇んで近着て見ると、その士官は重傷らしく相當疲れてゐる樣子である、ハッとした水兵は「しつかりして下さい、私につかまつて下さい」と、大聲で呼びながら漸く手が屆く所まで近着たのですが、士官は「僕は火傷がひどく長くは泳げない、救命袋は無駄だから、お前にやる、あせらないで救助を待てよ……」と、我身の苦痛を忘れて部下を勞はり、救命袋を水兵に與へ、士官は力盡きたか、海中深く沒し、水兵は僚艦に救助せられた。この士官にしてこの水兵あり、皇國海軍が何故に强いかは、この一例からも判

斷ができると思ふ。（平出海軍大佐談）

又珊瑚海々戰のとき、航空母艦を飛立て索敵に向つた偵察機は、ようやく敵艦隊を發見し歸りがけに、急報に接して出かけた我攻撃隊と出遇ふや、もはや油の殘少きを自覺しながら、攻撃隊を誘導して敵艦の位置に至り、油つきて遂に敵艦目がけて自爆したものもあつた、忘我の尊き例である。

又南方占領地の開發に從事する人々の輸送指揮官に任せし陸軍中佐佐藤久幸氏は、五月四日東支那海に於て敵潜水艦の魚雷攻撃を受くるや、乘船者の避難に努力したる後、重き責任感から船長と共に沈沒する船橋にありて、君が代を奉唱しつゝ船と運命を共にした。

米英側は如何であろふか。

比島に上陸せし皇軍の進攻、神速にして首都危しと見るや、コレヒドールに匿れて間もなく、美人と紙幣とを携え、部下將兵を孤立無援の絶島に殘置して、

濠洲に飛び逃れし米軍のマッカアサー將軍、或はシンガポールの防守危しと感ずるや、己が統卒して遠征せし部下將兵を置去りにして、潜かに故國に飛び還りし濠洲軍の司令官、さては抗日侮日に飽くなき竦腕を揮ひ大見榮をきりし蘭印のファンモークは、バンドンの陷落迫るとみるや、最愛の妻子を捨てゝ單身濠洲に逃げのびたのである、又ビルマに於て米支軍をあはせ指揮せし米のステイルウエル中將は、皇軍の猛攻に遭ひて混亂に陷りし麾下軍隊を見捨て、變裝しつゝ國境の嶮難を身を以て印度に逃れた。

皇軍將兵としては思もよらぬ、又考えることもできない奇妙不思議なる怪事である。之が所謂文化隆々たる米英の姿であり魂である。米英の崇仰する天帝もし在さば皇軍將兵の情味溢るゝ沒我の事績と、米英の自己主義とを較べて、いかに見てゐらるであろふか。

一四、熱時熱殺

潜水艦長の手記の一節に云ふ。

「〇月〇日、この附近は敵飛行機、終日哨戒中との情報ありたるを以て潜航突破を決意し、換氣を十分にして艦内の空氣を清淨にす、二時間、三時間、艦内の温度及濕度は上昇の一途を辿る、乗員裸体となる、休憩者は靜かにして發汗と炭酸ガスの放散を押へこむ、午後零時士官室にて温度三十八度、濕度九十パーセントなり、電動機室は四十度以上なり。

〇月〇日敵軍艦見ゆとの報に乗員の士氣大に昂る、皆相當の疲勞なるに敵艦を屠らんと默々として各自の部署を守り潜航を繼續、午後零時、士官室にて温度四十度を突破し濕度九十五パーセントに達し今や汗も出ず」

この蒸熱、この苦惱は想ふだに感謝の涙を禁ずることができぬ。攝氏三十八度

といへば内地の酷暑中でもたまにめぐり來る氣温である、珍しい高温である、まして四十度と云ふに至つては内地の誰もが經驗しない氣温である、幸に内地陸上の濕度は、六十パーセント内外であつて、汗の發散も可能であり、又いくらかは風も吹くので体温を放散する便宜もある、氣温は高くても濕度が低く、風さえあれば却て爽快を覺える、大陸の暑さがそれである。

然るに赤道直下の洋上にて、海底ふかく潜航し、緊密に閉したる艇内にて、換氣は望むべきもなく、乗員の体表より刻々發散する水分は、艇内に欝積して愈々濕度は昂り空氣は動かざるにより汗は發散せずして肌に粘り、人は體温の調節が思ふやうにならぬ、まことに活きながらの焦熱地獄の境地である。

「今や汗も出でず」に至つては實に悲痛の感がある。

この還境にありて、大君のため暑いとも苦しいとも云はず、ひたすら任務に專念する將兵は、役目とは申しながら何と尊いことであろふ、何といふて慰むべ

きか言葉を知らない、一億同胞は常にこの忍苦を心に銘じて、その苦みを頒つ心懸はせめてもの思遣りである。

大東亜戦下の夏がめぐり來ても、相互にこの辛苦を偲んで、かりそめにも病人や老人ならざる限り、避暑などゝいふことを考えては濟まない、「暑い」とたゞ云ふことだけでも、謹まねばならぬと思ふ。

昔洞山禪師は「熱時には閻梨を熱殺せよ」と喝破してゐる、閻梨とは自身のことである、暑いときには暑さの中へ驀直に突入して暑と一如となり、暑に同化することをいふたのである、うんと汗を出すことである。

暑を怖れて避けたり、逃げたりしないことだ、是は暑に負けることであつて、ある意味にては恥辱とは思はねばならぬ。

是が銷暑の要諦であり又戰時下吾々の覺悟でなければならぬ。

熱時自身を熱殺しつゝある潜水艦の將士を思ふ。

一五、忠實

米國が東洋のジブラルタルと誇稱した比島のコレヒドール島要塞攻略は、信に血戰死闘の凄絶なる繪巻物であつた。

「揚陸隊指揮艇の舵手高橋運一上等兵は、敵前〇〇米に於て、已に先づ左大腿部に一彈を蒙つたがものともせず、隻脚にて操舵を續け艇を接岸せしめた一刹那、再び敵彈を受けてその場に昏倒したが、氣丈な上等兵は再び起き上り、上陸部隊の揚陸を援助し、次で離岸に際しても「操舵は自分の任なり」と稱し更らに操舵を續け、離岸五十米の沖に出た際、遂に息は絶えて舵を握りしめたまゝ壯烈なる戰死を遂げた。

艇長は固く操舵桿を握つたまゝの高橋上等兵の手を執り、一指づゝこれを解い、

て、漸く操舵手を交代せしめたのであつた。

又第一次上陸の際、舳手たりし青木義太郎上等兵は、敵前數百米を航行中右腕二箇所に貫通銃創を受けたが屈せず、着岸するや、敢然左手を以て歩板を繰り出して上陸準備を完成せしめ、摸相綱を持つて卒先上陸し「早く上れ、早く上れ」と上陸部隊の士氣を奮起せしめつゝ摸相綱を確保したのである、その間にも敵砲彈は無數に波うち際に落下してゐた、やがて歩兵部隊の上陸は完了したが、上等兵は依然として摸相綱を摑んだまゝ一歩も動かないので不審に思つて艇長が近づいた時には、既に上等兵は腰に摸相綱を三筋も巻きつけたまゝ、頭、腕、足の全身蜂の巣のやうに敵彈を受け絶命してゐたのである。

壯烈の極みであり、忠實の極みである。

比島方面軍情報部長は「コレヒドール島の攻略は、單に近代的科學戰の勝利ではなく、實に三千年來の傳統に培はれたる大和魂の顯現にほかならないのであ

る」といふてゐる。

しつかと握つた舵桿の指には一本一本に魂がこもつてゐたと思ふ、死んでも離さぬ任務の舵、なんと忠實ではないか、一指一指づゝを解いた艇長の心持はいかゞであつたろふ。

また、已に右膊に負傷しながら、卒先跳り上つて戰友の上陸を援けつゝ、綱を腰に巻いて仁王立のまゝその場を動かず、散華せし上等兵は、鬼神もまた避く壯絶なる姿である。昔衣川の夜討に敵を散々に惱ましたる後、矢おもでにたちて全身みのゝ如く、立ちながら討死せし武藏坊辨慶を今に見るやうである。

近くは四十七年前日清戰役、成歡の闘に敵彈を胸にうけても喇叭を口にしながら血沫をもつて突擊の譜を吹いて殪れし木口喇叭手は同胞の記銘に今も猶ほ新たなるところであつて、親しみふかい事績であるが、年代を隔つるも同じことが次ぎ亞ぎに現はれて來るのは、皇國の尊い魂の連續であり複活である、いつ

までもこれをつゞけねばならぬ。

附記

比島コルヒドール要塞の攻略に方つて、之が偵察に任じた齋藤中尉機は、雲のやうな敵高角砲の彈幕を冒して繰返し〳〵敵陣の撮影を終つたが、偶々己が機が既に敵彈のためひどく損傷してゐることに氣づいて自爆を決意したもの、撮影した敵陣地の寫眞を報告しなければといふ、重大なる任務に鑑みて、歸れるところまで、どうしても歸ろふと苦心の難飛行を續けたが、最早どうにもならぬので、海濱をめがけて不時着を試みたが、もんどり打つて遂に機から火を發した、恰もよし、附近にあつた歩兵部隊が驅けつけたとき、中尉と軍曹とは已に綷(コト)切れて機が燃えてゐたが、附近に布に包んだ寫眞機があつたので、之を拾つて報告すると、中から撮影したフイルムが出たので、早速之を現像して攻略の計畫上有利に役立つたといふこ

とである。

萬難を排して任務を遂行し、自分等は愛機と運命を俱にして散華しながら、大切な寫眞を投げ出して友軍に托したことは、眞に任務に忠實であつて其の心情を推測するとき感激に堪えない。

過般ベルリンを爆撃した英軍飛行機は、ドイツの高角砲のため損害を受けるや、搭乘者はみな機を見捨てゝ落下傘にて降下し、その中の女飛行士は、地上におり立つや、早速コンパクトを出して化粧をしたといふことである。

又過ぐる皇國内地爆撃の米軍飛行機は、支那まで落延びたが、塔乘の將兵は遂に機を見捨てゝ逃去中、我軍に拉はれて、その時撮影した内地の寫眞諸共に俘虜となつてゐる。

やるだけのことをやれば、それで事濟みのやうに思ふのは歐米の思想であ

る。

落下傘にて飛降れば、自己の命は命かるもしれないが、飽くまで愛機を操縦して自分等ばかり助かろふとしないのが、皇軍將兵の尊い心である、「城を枕に」といふことは古來武人の覺悟である。

「忠實」といふ言葉は歐米にもあるが、歐米の忠實は命がけではないやうだ、我等はこの皇國傳統のこの尊き精神に益々磨きをかけなければならぬ。

一六、練　磨

蘭印を攻略せし今村陸軍中將は蘭印の敗北の原因の第一に「オランダ人は、永年の平和に慣れて虚榮に流れ、ジャバ全島に、觀兵式場はあれども、一つの練兵場も持たぬ有樣になつてゐた」と擧げられてゐる。

又平出海軍大佐は「米英海軍が輪形陣だとか、ネルソン式肉薄戰法などいふ兵術の形體を後世大事にして、訓練と精神力の練磨を怠てゐる間に、近代兵術は一轉したのである、玉手箱を開いたときには、已に遲く、徒らに自己の頭が白髮になつてゐるのに氣がついただけである」と、米英海軍を揶揄してゐる。

ともに訓練の不足を云ふてゐるのである。

印度洋に活躍する我が驅逐艦より海軍報道班員の報告中に左の一節がある。

「機械にも勇士達の血が通つてゐるやうだ、全く機械と人とが呼吸をピッタリ合して動てゐる、しかも艦全體は、艦長の意圖のまゝに、手足を運かすやうに自由自在に動てゐるではないか、まさしく神技だ、よくもこんなに訓練ができたものだ、絞るやうに汗に濡れた勇士達に、心から「ありがとう」と御禮を云はずにはおられない、しかも戰爭になつてからは、內地にゐたときよりも、

半分以上も樂だといふ、今更ながら月、月、火、水、木、金、金の猛訓練が偲ばれる」と。

我陸軍も亦た同じことで演習の方が實戰よりも苦しいのである、實戰では敵が負ければそれまでゞあるが、演習はやめよと云はれるまでいつまでも續くのである。

內地にて、市民のまだ眠てゐる夜明けまへより、雨にぬれながら肅々と行軍する將兵の靴の音、車輪のびゞき、さてはその頃に起る劇しい銃聲、これは皆忘我捨身の尊い訓練の一部の表れである、吾々は心から尊敬を拂はねばならぬ、銃後の皇民は各々の職場に於て果してこのやうに猛烈な訓練を行つてゐるか、どうか、省みて陸海軍人に恥ぢる所はないか、及ばざる所はないか、能く鍛えた刃は切れ味がよい、よく練つた團子はその味がよい。

今は總力戰である、總力戰とは銘々が戰爭を分擔してゐることである、銃後の

皇民の心の練磨、身躰の練磨は、直に戰場に役立つかどうか、銘々の職業の練磨は、軍需の充足に、生產の擴充に役立てゐるかどうか。

畏れ多いことであるが、鏡、璽、劍は皇國の神器であり、神寶であつて鏡は智に、璽は仁に、劍は勇になぞらえて修德の表象として崇められてゐるが、私は更に吾等臣民の鍛練、琢磨の聖訓として謹仰せんとするものである。

鏡はその質は鑛である、磨かなければ明を增さない、璽はその質は石である、琢かなければ光を發しない、劍はその質は鋼である、鉗槌を加えて研かなければその利を加ふることはできない。

即ち神寶は、吾等臣民に鍛練の一日一刻も忽にすべからざることを、實物の教訓を以て最も切實に諭示し玉ふものとして、日常相互に先づその心を練り、その業を磨くことに努力しなければならぬと思ふものである。

一七、深慮

ある海軍の飛行將校の話に「海軍は洋上に敵の航空機を捉えて、斷然、皇國本土に空襲をさせないことに努力してゐる、本土に空襲を受けるのは、重要施設や、市街が損害を蒙るのも殘念であるが、それよりも吾々が氣にかゝるのは、無心の頑是ない子供等に、空襲の悲慘事を味はせたくないからだ、それには吾々が死んで護ればよい」と。

何といふ思遣りの深い且遠い言であるか、之には「吾々が死ねばよい」といふ、悲壯な、眞劍な、獻身的な心構を聞いて泣かない人があろふか。

自からを空ふし、身命を犧牲として、無心の子供等の心に痛い刻みを入れないとするのは、尊い神のやうな佛のやうな心である。

果然、我海軍は、東太平洋に、敵の航空母艦を求めては勇猛果敢、愛機諸共の體當を以て相次で之を擊沈してゐる、一分間五萬發を發射するといふ高角砲により艦を覆ふ彈幕の中に突込んで行き敵艦を沈めずんば休まざる氣魄は、鬼神もために哭く壯烈さである、未だ歸還せざる〇〇機といふ「ニュース」を聽く毎に私は右の言葉を聯想して覺えず合掌する。

子を持つ親、幼き弟妹を有する兄姉は、海軍將校のこの心構を、夢寐にも忘れてはならぬ、ありがたい思遣ではないか。

若い將校に第二世の皇民に對するこの思遣があるのに、內地に安住する老年や、壯年にこの思遣の「どうか」と思はれるものを見受けるのは、注意を要することぞ思ふ、即ちこの戰時下の皇國興廢の大切なる秋にあたつて、眞にその心構があり、私を後にして公に竭くす行跡がよく行はれてゐるかどうか。

疚しい行爲や、不屆な行爲や、不謹愼な行爲や、だらしない行爲が實行せられ

て、鋭敏な青少年の耳目に映じてはいないか。
眞に我等が業蹟を引繼ぐべき第二世に對する思遣が、深切に眞劍に拂はれてゐるかどうか。
命がけに思つてゐてくれる海軍將校に、慙ぢることはないか。

一八、かげ武者

日露戰役のとき、敵のバルチック艦隊を求めて挺身し、「敵艦見ゆ」との信號を送つた信濃丸の雄々しさは、忘れ難い思出である。
大東亞戰の局面は擴大せられて、東太平洋より印度洋に及ぶ廣袤(ボウ)數千海里の青海原には、本土の防衞に、基地の警備に、默々として嵐に漂ひ荒波に揉まれながら、哨戒をつゞけてゐる監視艇のあることを逸してはならぬ。

儼たる制海權のかげに、かふしたかげ武者の活躍があるのである。
四月十八日敵の我本土空襲に方り、太平洋上に米の航空母艦群を發見した監視部隊から敵艦隊來襲の第一報が打電された、それから數刻、數本の電報を發したまゝ、その艇は太平洋上に消え失せてしまつた、恐らくは木の葉にも等しい監視艇は、敵の發見する所となつて、悲憤の最後を遂げたのであろふ。
この日、同じく他の監視艇も、敵機の猛襲を受け、機銃掃射により壯烈なる戰死者を出したが、奮戰して敵を擊退した。
又敵の爆擊により前部船底に大穴を明けられ船は、浸水して沈沒せんとしたが、重量物を海に投じ辛ふじて數日の後、基地に還つた監視艇もあつた。
又去る二月二十四日、敵の部隊が大鳥島を襲擊した時、同島沖合遙か洋上にあつた監視艇は、敵の集中攻擊を受けて衆寡敵せず、艇に數彈をうけ、今はこれまでとみるや、艇長は「われ自爆せんとす七時四十分」の悲壯なる無電を打

ち、更に「乗員一同沈着死に就く七時五十五分」といふ最後の無電を殘したるまゝ汪洋たる浪に沒した、艇長以下全員從容として艇と運命を共にした壯烈さに且つ感じ且つ泣かぬものがあろふか。

又三月十五日、雨の太平洋上は視界も惡く、激しい風浪に揉まれながら監視に任してゐた一艇は、右舷後部に物凄い「ショック」を受け艇は左に傾いた、敵潜水艦の魚雷攻撃を受けたのだ、吃水下に一米四方の大穴が明いて機械室に浸入した、艇長以下は漂流を決意し艀に移乘し、もの凄く荒ふ狂ふ暗夜の海上に漂ひはじめ、二十八日間、いくたびか襲ひかゝる死魔と闘ひながら協力一致して遂に救はれたこともある。

又五月十日朝、太平洋の洋心で哨戒中の監視艇は、敵潜水艦と遭遇し、敵は快速を利用し砲撃を加えて來たので、艇も亦奮然として卍巴の血戰を展開し、艇長、船長相次で壯烈なる戰死を遂げたが乘員は毫も屈せず、應戰二時間餘、敵

潜水艦は遂に逃亡し、一週日の後、滿身創痍の監視艇は基地に還つたこともあつた。

攻撃力もなければ防禦力にも乏しい扁々たる小舟である監視艇は、一度び軍艦にめぐり逢はんか、一撃の下に木破微塵に破壞せらるゝは必定である、この運命の下に安んじて只任務のため堅忍、耐苦、何の娯樂もなく、日は日ねもす、夜は夜もすがら、たゞ波に明け波に暮れる洋上に、木の葉のやうに漂ひながら、眼の痛くなるほど洋上を睥んで敵を探し求むる監視艇は、まさに隱れたる英雄と云はねばならぬ。

華やかな舞臺面に較べて人知れぬ苦勞をなすは、いかばかり齒痒く殘念であろふ、この地味ではあるが、緊要なる難事に膺つてゐる監視艇に對し、銃後の皇民はその日その日をおだやかにおくりて、安らかなる眠に就く前には、先づこの陰の勇士たちの忍苦と苦闘に、心からの感謝を捧げなければならぬ。

又空襲の警戒警報の傳達を受くることは、即ちあの扁々たる監視艇が洋上より
する敵艦や敵飛行機を發見したことの反映であつて、無防禦の小艇が、いかに
苦戰をしてゐるかを想ひ、その無事を神明に禱念せねばならぬ。
燈火管制や消火の準備と共に、この敬虔な心持を喚起せねばならぬ、かくてこ
そ防空の行動に眞劍味が湧て來ると思ふ。

一九、師匠

皇國は、明治維新直後、海軍は範を先進の英米に採り、或は留學してはその學
術を討ね、或は艦船の製作を委ね、孜々としてその蘊奥を探りて戰伎製艦に努
力し、且數回の戰役を閲して、皇國傳統の兵法と、尊き實戰の體驗とを巧みに
調和して固有の戰法を案出し、特殊の艦船を工夫するやうになつた。

陸軍は、初め範をフランスに採り、後ちドイツに轉じ、海軍と駢進して其の長
を採り短を捨て、皇國傳統の兵法に基調をおいた特有の戰法を策案して、今日
の强大を致すに至つた。
然して曩きには青島に於て師匠たりしドイツと一戰を交え、今又た陸海軍を擧
げてさきの師匠たりし英米と雌雄を決するに至つた、「士別かれて三日、まさ
に刮目して相待つべし」と云ふ古語があるが、生長の速かなる皇軍陸海軍は、
實に異常の生育を遂げたのである。
由來兵法は、下手を相手とすれば、いつまでも拙なく、上手を相手とすれば、
めき〳〵と其の技が上達することは、碁や將棋と同じことである。
されば、大東亞戰開始以來、流石の英米も風の前の枯葉の如く、敗退に潰走を
かさねて、我が武威は世界戰史に燦たる光輝を放つやうになつたが、茲に心す
べきことは、資源に富み、執拗尊大なる英米は、長期戰を企劃して、我が戰法

に鑑み學ぶ所があり、這回の戰爭によつて、敗けながらも益々戰伎に磨きをかけたことを忘れてはならぬ。

只哀しいことには、精神の問題であつて、こればかりは、永き歴史の磨きになつたものであるから、俄においそれと眞似をすることは困難ではあるが、吾等は決して驕つて油斷をしてはならない。

「青は藍より出でゝ藍より青し」といふ語がある、今の日本がそれである。師匠は永へに師匠ではあり得ない、師匠は循環することを知らねばならぬ。

二〇、奇　襲

わが海の荒鷲が、虎穴に飛び込んで虎兒を捉えるすざましい戰ひ振は、一億同胞の感謝し崇仰してやまない所である。

支那事變の緒戰には、東支那海に荒れ狂ふ凄ましい颱風を衝いて首都南京を渡洋爆撃したり。

大東亞戰の劈頭には、前日來の暴風に逆巻く巨浪にもまれる母艦を飛び起つて、布哇の眞珠軍港を猛襲したり。

六月には、なほ霙まじりに吹き荒ぶ吹雪が、北太平洋に激浪をあげて、剩さへ乳のやうな濃霧が視界を奪ふもの凄い荒天を冒して、アラスカのダッチハーバー軍港を奇襲したりした。

元亀天正の昔、荒馬に跨り、長鎗を揮つて大雷雨を衝き、陣頭に叱咤した織田信長の桶狹間の戰を想ひ出すのである。

急襲、奇襲は先制を得るゆえんである。

富永海軍少佐の談に「想起するまでもないソ聯空軍の再建目的は、開戰劈頭敵國の中樞部を猛爆して戰爭繼續力を覆滅し、同時に國內に收拾すべからざる混

亂を惹起せしめ、その最も得意とする思想戰の展開と相俟つて、一擧に敵の戰意を挫折せしめんとする方針の下に着々準備を進めつゝあつたのである、然るに一旦獨ソ開戰に當ては、有力なる獨空軍は間髪を容れず、先制國境方面に集結待機中のソ空軍主力に徹底的打撃を與へて、その恐るべき企圖を水泡に歸せしめ後顧の憂を絶つと同時に、自後極めて有利な戰勢の下に作戰を續行するを得たのである。

飜て大東亞戰直前に於ける敵の對日戰備の主流を見るに、正しくソ聯の抱懷した戰略思想と全然揆を一にするものであつたと云ふことができる、即ち米國を首謀者とするA、B、C、D軍事合作の最も顯著なる特質は、前進基地を中心とする航空作戰と、潜水部隊の活用に絶大の信頼を繋いでゐた點であつたことは明白である、この實證としては、英極東軍司令官ホッバム大將は、英空軍の第一人者であり、米極東空軍司令官フレアトン中將は、長距離爆撃の權威で

あつたこと、米アジア艦隊司令官ハート大將が潜水艦作戰の專門家であつた事實より見れば、一目瞭然であろふ、特に基地航空兵力の增强に重點をおき、比島、シンガポールを兩翼として蘭印、南支那海の制壓に乘出さんとして虎視耽々活潑な航空作戰の展開を自信滿々期してゐたのである、この企圖は「開戰となつたら米飛行機は數時間のうちに日本の大都市や工場地帶を爆撃するだろう」といふ米國內の放言や「開戰と同時に日本の心臟部を灰燼に歸せしめるために、强力なる爆撃機の用意あり」と、米政府首腦部が豪語してゐた事實から推察するところである、數字上から見れば比島方面のみでも五十機以上のいはゆる空の要塞をはじめ、五百五十機に達する航空兵力を集結して、その威力を誇示し恃む所があつたのである、然るにその結果は米の期待は裏切られその大言壯語は空しかつた云々」と。

又米國上院議員ヒットマンは「日本がわれの云ふことを聞かねば、之に對する

答は、わが大海軍と大空軍である」と傲語した。

彼等の驕傲と自己陶酔の、いかに甚しかつたことを推測することができる。

企畫も、兵備も、之を活かすのは人であり、人の魂であり、人の力であり、然も精練されたる力であることを知らねばならぬ。

駿、遠、三の大軍を擁して旌旗天を掩ひ、尾張の織田勢の如きは鎧袖一觸之を蹴散さんとした今川義元も、遂に雷雨下の奇襲にその首級をさずけて全軍總崩れとなつた。

史實はまことに歴々たるものがある、昔も今も同じである、衆を恃んで慢伏せしめんとするもの、恫喝を以て威壓せんとするものは、其の心が已に驕慢であるる、「驕る平家は久しからず」で驕るものは必ず敗れる。

自からを知り敵を識り、自からを圖り、敵を侮らざることが大切だ。

附記

米國は軍需工場に Remember Pearl Harbor（眞珠灣を忘れるな）との掲示板を擧げて、工員の注意を喚起してゐる、尚ラヂオ放送の間隙にはこの言葉を放送してゐる。更に近頃は「生存戰爭」とまで叫んでゐる。

尚米當局は軍備の擴充に狂奔して特に昭和十九年の對日攻勢を呼號してゐる。

英國は For our Victory（われらの勝利のために）の標語を、大臣の演說にも、將軍の訓示にも、母が子供をたしなめる言葉にも用ゐてゐて、一種の合言葉のやうにもなり、又た挨拶にもなつてゐるやうだ。

又英國の將軍連はたとひ敗戰が重なつても最後に勝利を獲れば良いではないかと云ふてゐる。

猶重慶の蔣介石は自給自足を策案し三百餘萬の兵力を擁しており、抗戰力は弱つてゐるが、米英の軍備擴充ができて日本に反攻するときは、一役を

買つて打つて出でんとしてゐるのである。

二一、難事

海軍にて奇抜な兵器を造つたとき、之を採用するか否かの會議が開かれた。採用は三、反對は七であつた、然るに議長であつた齋藤七五郎少將は、少き方の可の三に同意して之を採用することにした、そして云ふには「多い方は誰れでも出來る、だから、どこの國もさうやるにちがいない、それでは日本は勝てない、少ない方は出來にくいから少いのだ、それをやれば勝つことができるのだ」と。誰れでも出來ると思ふことは、やらなくても良い、人に出來ないと思ふことをやるのでなければ叶はぬ、これを兵器ばかりの話と聞いてはならぬ、皇ら海軍のすざましい決意であると思ふ、恐らくは總てがこの決意の下に指導されてゐ

ものであろふ。た

陸軍のビルマ作戰に於ても、敵の夢想だにしなかつた國境の峻險と、ジャングル地帶を突破したればこそ、海面より來ると思てゐたダウオイ方面の英軍は、急襲されて一たまりもなく潰走したのであつた。

尊い教訓であり、また人世の活きた處生訓であると思ふ。

二二、必殺の兵器

昭和十七年十二月八日開戰劈頭、布哇眞珠軍港を攻撃せし海軍特別攻撃隊九勇士の壯擧は、信に鬼神をも哭かしむる難事中の難事であつて、之を敢行せし忠誠の一念は只々感激の極みである。

當時大本營の發表には『自から必殺の攻撃兵器を設計してその製作ー立會ひ、

部内に對しても嚴に機密を保持し、短時日の內、用兵者、技術家、渾然一體となりて工員に至るまで晝夜兼行にて製造、實驗に、或は準備訓練に心血を注ぎたる結果、今次開戰に先立ち緊急の際に完成を見たるものなり』と。

蓋し敵の防禦網を突破し進擊するに便なる小型の潛水艇であろふことが想像することができる。

然るに過ぐる日露戰役のとき、明治三十七年九月十七日、ときの淺間艦長八代六郎大佐より大本營參謀小笠原大佐に寄せたる書翰中に左の一節がある。

『淺間は佐々木機關士の發明に成る潛航器を使用し、一擧旅順口內敵艦を全滅する計畫なりし、九月九日十日の夜、兩回、港口に近接せしめ、十日夜には防材二重を侵して進み、哨艇六隻の突岩より東方に舷側を外方に向け相連なりたる處まで進み、猛烈なる銃砲火を受け突入する能はず、審さに港口防備の狀を知り、十五日夜再擧を計り、愈々港內深く突入と決し、其準備中、下瀨火藥を

裝したる機械水雷十二個、船載水雷艇上にて爆發し、全員十七名粉碎せられ、二名丈け切れ〴〵の死体發見、他は飛散し盡し跡を止めず、眞に極慘極悲事に候、抑も余が此度の事を企てたるは、一已の名譽心に驅られたるにあらで、旅順陷落も荏苒遷延する內には、不慮の仲裁者など出て戰の結果を收むる能はざるに至るやも計られずと懸念し、且は思ひがけなく「ツヱザレウイッツ」、「レトウヰザン」も堂々として出て來り、八月十日には我十二吋砲も大分損害を蒙りたる以上、戰鬪艦は今は眞に國の至大なる寶にして、是なくは勝ち軍も負となるべきを思ひ、何卒至小の損害を以て敵艦を全滅し、我が大艦をして早く修理を完成せしめ、徐ろに「バルチック」艦隊に備へしむる事を得せしめんとの苦衷に外ならず候云々……」と。

之によつて考ふるに這回の特別攻擊隊のことは、已に日淸戰役中、威海衞に於ける水雷艇を以てする敵主力艦の奇襲があり、さては日露戰に旅順口軍港の攻

擊に方りても着意せられしことを窺ふことができる。

今は造船術の進歩、科學の發達に伴つて精緻巧妙なるものが造らるゝに相異ないが、三十七年の昔、はやくも之を工夫せられたことは感歎を禁じ得ないのである、若しこの企が成功してゐたならば、閉塞隊と共に一世を驚嘆せしめたであろふ。

附記

日露戰役、旅順口攻撃には、ある海軍士官は魚雷を抱いて泳いで港内に潜り込み、敵艦を轟沈せんとしたこともあつた。

曩の上海事變には、爆藥筒を抱えて敵陣に跳り込んで敵を震憾せしめ、一世を驚歎せしめ三勇士もあつた。

つぎから次へと、壯烈なる事績が現はれて來る神武の國は、昔も今もかはりのない歴史を繰かえして、尊くも又頼母しいことである。

二三、國語

バタウイヤ飛行場の警備に任しつゝ「空の港」を造る任務に服する一兵の、母へ贈りし手紙の一節に

「前略……こゝで僕は二ツ星の聯隊長に出世したのです、僕の號令一下、米、英、蘭、濠、寄合世帶の捕虜どもが手足のやうに動くのです、ジヤバで八萬から捕まつた意氣地のない捕虜のうちで航空關係の捕虜ばかり數百名をこの飛行場へ連れて來て、朝の九時から「前へ進め」「氣をつけ」と僕が勇ましく號令をかけると、彼等は諦めに似た顔つきで勞役に從ひます、今までは高慢ちきな顔をしてゐた彼等が、今は彼等の自己繁榮の防衛に當てゐた據点を我軍に占領せられ、大東亞共榮圏の防衛基地たらしめるために、營々と勞役を勤めて

ゐるのですから愉快でなりません、武士として一掬の涙なきを得ませんが、彼等に徒らに人情をかけることは却て増長させることになります。

お母さんも御承知のやうに、僕は英語は苦手です、だから捕虜に向つて語すのに、一から十まで日本語でやつてゐます、それで十分通ずるから妙なものです、彼等は日本語が判らないといつて、我等の命令に背くわけにはいかない、勝た國の有難さですね、誰もいふやうに「戦には必ず勝たねばならぬ」と泌々と思ひました。

彼等は捕虜になつたのは恥ではないが、働くのだけは許してくれと圖々しく哀願するのです、圖々しいといふよりは、働くことが不名證だといふことが、彼等の常識になつてゐるかも知れませむ。

あまり厚かましいので「馬鹿ッ」と大聲で怒鳴つてやつたら、彼等は「氣をつけ」の號令と勘違して、一時間も直立不動の姿勢をしてゐたので、腹がたつた

後だけに、氣の毒といふよりは、思はず噴き出してしまいました。

かういふ考を持た人種に、これまで尊敬を拂つて來たことは、もう清算しなければなりません。

英語が話せないと「インテリ」でないと思つてゐた、我國一部の米英心酔思想もこの際、一擧に吹き飛ばすべきですね、彼等の根性を肚の底から叩き直すためには、あまい顔は禁物です、それかといつて、特に苛酷な待遇をしてゐる譯ではありません、武士道を尚ぶ日本人には、捕虜だといつてどうして殘酷なことができませう、食事も彼等の嗜好に應じたものを給與し、煙草も晝寢も、おやつまでやるのですから優遇してゐるわけです。

彼等の勞力で飛行場は、日々に見違えるやうになつて行きます云々…下略」

何といふ興味のふかい、教訓にみちた書翰であろふ。

日本語で堂々と捕虜を動かしてゐる一等兵の勇ましい姿が、まざ〳〵と見える

やうで賴母しくも又誇らしい感を禁ずることができない。

私も嘗てフイリツピンに行てゐたとき「ホテル」の專屬の比島人の「ボーイ」に、初めは英語で話してゐたが、やがてぼつ〳〵と日本語を教え込んで、朝夕の挨拶から用達まで日本語で十分に間に合ふやうにしてしまつた、今頃はどうしてゐることであろふ、今昔の感に堪えぬ。

英米に心醉し、白人を憧憬し、之に接近するを名譽と考え、之と談話するのを誇と思ひ、果ては皇國の女のなかには淺はかにも貞操までも提供して歡心を求めた情けないものがあつたことを追懷するとき、苦笑を禁じ得ない。

又皇國の學校で、日本語で間に合ふ所を、さも得意氣に洋語を使つて、日本の學校か、歐洲の殖民地の學校か、それともその國の屬領か、わけの判らぬやうな教師もあるのである、殊に科學方面の學校にこの傾向が多い、之が支那に於て排日侮日の宣傳に巧みに利用せられてゐる、事變前、山西省の閻錫山の布告の中に「日本の學校へ行くと、洋語を使つて教育をするとのことである、洋語を用ゐねばならぬのは、それは請け賣の學問にちがひない、されば寧ろ、その洋語の本國へ直接往つた方が、ましである、そんな浮薄な日本の學問は學ぶ必要がない」といふて我を侮蔑し、我を排斥する宣傳をしておつた、一應は最もな言分であつて、背に汗を覺える教育者も相當にあろうと思ふ。

昔は支那からも、澤山の留學生が、我國に來てゐたが、その後少なくなつたのは排日のせいもあるが、こうしたことも影響してゐる所であつて、教育家は反省する餘地があると思ふ。

自から國語を卑んで他國語を使ふのは、已に精神的にその國に降伏した徵である、陸海軍人には降伏者はない、教育家にも降伏者があつてはならない。

又渺たる一兵が、克く我が武士道を理解して居つて、或はひそかに捕虜に一掬同情の涙を濺いだり、又恩威ならび行つてゐるのは嬉しいことである、日本精

神の花は南の國にまで咲き匂つてゐるのである。

附記

私は狹小、偏屈なる心持から、外國語をみだりに排斥するものではない、かくいふ私も英、佛、獨の三箇國語を學んでゐるものである、露西亞へ行つたときは露西亞語の初歩も、南方へ行つた時は、馬來語をも心がけて稽古したものである、只他國語を學び、之を使用する心構として、自主的精神を失はないことである、「鄕に入つては鄕に從へ」といふ諺もあるが、自分から自分を卑下し、自分を屈從させてまでも、隨ふのではない、自主の精神は、あくまで自主でなければならない、隨所に主とならなければならない。

又昔から「先づ國語より」といふ訓言がある、他の國へ勢力を扶殖するには、先づ國語を普及することの大切なることを云ふたものである、豊臣秀

吉が、三韓征伐のとき、日本語を攻略するに從ひ普及することを訓令してゐるのは、蓋し卓見といふべきである。

南方の新領地には、どし〳〵と國語が普及せられねばならぬ、現に滿洲國に於ても、日本語のできる役人は、幾分か給料が高く拂はれてゐる、奬勵の一方法である。

歐洲の第一次戰爭までは、露西亞の學校の外國語といへばフランス語であつたが、第一次戰爭前後からは、已にドイツ語が採用せられて、中學生や、女學生は、ドイツ語をよく知つてゐたことを私は體驗してゐる、ドイツの勢力は、かくして露西亞に侵入しつゝあつたのだ。

國語を尊重し且之が普及に努めねばならぬ、それには國體の本義に徹して自主的の魂をしつかりと磨きあげることだ。

添加

歐洲戰局第四年の九月六日、獨逸ゲッペルス宣傳相は、國民精神作興運動のため「ダス・ライヒ」紙に一論文を發表したが、その一節に「英國人は他國人が、自分と英語で話すのは、當然のことゝ考えてゐる、しかし、吾等は外國人に對し無理强ひをする勇氣がない、ドイツ人は彼等と片言の英語を語り、米國人に對しては純粹の英語では困るだろふと、故意と米國流の俗語まで操ろふと試みる、こんなことは、世界に於てドイツ人に好意をもたせる特性ではなく、むしろ輕蔑の心を起させる所以だ」と云ふて、おる、國語を通じて强き國民的感情の湧起を要求してゐることを知ることができる。

二四、議事

ある基地にて海軍報道班員の手記に左の興味ある記事がある。

『基地隊の士官室で、よく議論が始まる、一つの問題に對し大佐も、中佐も、少尉も、みんな車座になつて猛烈なる意見のやりとりがある、私は居たまらなくなつて座を離れやうとすると、先任將校が「まあ慌てずにゐて下さい」といふ、議論はなか〳〵につきなかつたが、最後に隊長が「よし、わかつた、それに決定する」と宣言すると、ぴたりと言葉は止つた、その後では和やかな雜談が交される「こゝは一家の中だから、皆が思ひ殘す事なく意見を出す、しかし、それが一つに決まると、絶對に文句は出ません、そして外部へは一本筋になつて出て行くのです」先ほどの荒い雲行に駭いてゐた私に、こういふのである。

あることに就て議論を鬪すのは、畢竟實行を適切にせんがために議を練るのである、よく練るのであつて批判してはならぬ、議論をせんが爲めに議論をして

はならぬ、又議論のために貴重なる時間を空費してはならぬ、實行が目前に待
てゐるからである、實行が招いてゐるからである。
されば實行をめざして、なるべく速やかに議事が進まなければならぬ、議論倒
れに潰れてしまつてはならぬ、そして一旦こうと決めた以上は、最早かれこ
れ、こだわるのは男らしくない、軍人は之を厭ふ。
ビルマの中央行政長官バモ博士は「五十年の間、英國の自由主義の下でビルマ
人は口達者になつたが、實行力は失つてしまつた」と慨歎してゐる、フイリツ
ピン人も亦米國の自由主義教育のため口達者になつてゐる。
孰ら皇國を顧るに、我が皇民も口ばかり達者になつてはいないか、默々として
業務に努むる人よりも、お饒舌りをする人が多くはないか、
田舎では口利きは昔は少なかつたが、今は多くなり過ぎてはゐないか。
議事のときに議するのでなくて、自分を宣傳するがために辯舌を弄する人はあ

りはしないか、なんでもかでも、無闇にたゞ反對したり、横車をおすを以て快
とする人はありはしないか、一旦決まつた事柄を、いつまでも、ぐつ〳〵と蔭
言を繰返す人はありはしないか。
今は實行を主んずる時代である、速やかによく練つてどし〳〵と實行に移すべ
き秋である、百の議論よりも一つの實踐が總てを解決する時局である。
英のチャーチル首相がルーズヴェルトとワシントンにて談議をしてゐるとき、
我が潜水艦は米國西海岸のオレゴン洲の軍事施設に砲撃を加え、西太平ではド
イツ潜水艦のために、米英の船舶三十萬トンが沈められ、北阿に於ては獨伊軍
は長驅英軍を追ふてエジプト領ふかく進撃してゐるではないか。
ニユージーランド駐米公使ハレーは云ふておる「吾等は全く議論が多すぎる戰
闘は一向渉々しくない」と。實行の世の中である、口はなるべく閉ぢて手、足
を主に働かすべき世のなかである、お談議に暑を費してはならない、貉評定や、

小田原談合は須らく唾棄すべきである。

二五、慈心

避難民は、「住民の家を荒すな」といふ嚴格な我軍紀の下に護られてゐる、「樂しいわが家」へ急ぐのである、この住民の群に混つて銃を捨てた米英や比島兵が續々山を下り捕虜收容所へと向ふ、住民も米兵も、一緒になつてマリウエレス街道は大きな人の波で搖れる、少し離れていたいけない一人の子供を連れ、生後間もない赤ん坊を抱いて歩く母親の姿が特に目を惹いた。

兵隊さんがづか〳〵とミルクを持つた米兵の所へ行つて、そのミルクをあの子供に一鑵わけてくれと云ふ、米兵は横にかぶりを振つてやろふともしない、「子供を可愛想に思はぬか」と、大きな聲を出し日本語で怒鳴つた、すると米兵はびつくりして澁々ながらミルク鑵を一つ兵隊さんの前に差出した、兵隊さんはニツコリ笑ふ、そのミルクを母親に與へてやつた、母親は幾度も幾度も頭を下げて感謝した、情深い兵隊さんに何といふていゝやら言葉も通せず、只母親の眼がしらからポロ〳〵と熱い感謝の涙が頰を傳ふ、この母親の胸に抱かれてゐる赤ん坊は、生後八ケ月といふのに、戰爭のために母親のお乳は少しも出なくなり、赤ん坊は發育が惡くぐつたりしてゐる、（バタン戰場、陸軍報道班員記）

なんといふ、うるわしい戰場の光景であろふ、わが將兵には兵馬倥傯の裡にも住民を勞はる心の餘裕と、慈愛の念が充ちてゐるのである、強いのみでなくて「情け」は古來わが武人の信條である。

八紘爲宇の皇謨は、かくしてこそ南の國の果てまでも光被するのである。

又こんな話もある、昭和十七年三月初旬インド洋の荒波を蹴て活躍してゐた我が潛水艦の前方に、敵の三千噸級の貨物船が現はれた、艦長は敵が武裝してゐ

ないのを確めると浮上つたまゝ、堂々と逼つて先づ第一彈を船の前面に向て發射し停戰を命じた。

曾て第一次の歐洲大戰にドイツ潜水艦の跳梁に惱んだ英國は、策を以て囮り船を作つた、即ち商船を裝ひて潜水艦を見ると簡單に降服を申出たうへ、近づくや忽ち隱した火砲を露出して攻撃し潜水艦を葬たのである、それ以來國際海戰法規に定められた警告攻撃も、潜水艦の場合には無警告襲撃を行ふやうになつてゐた、しかし我が潜水艦は悠々と海戰法規通りに行動した、豫て覺悟をきめてゐた敵貨物船から船員が救命艇に乘り移りかけた、その艇には帆も張られて敵ながら天晴れな平素の訓練振が窺はれた、全員艇に乘移つたのを、我が潜水艦が見るや、初めて砲撃命令が出た、初彈から命中し、瞬時にして先づ船首を波に突込んで撃波せられた、救命艇は已に帆に風を孕ませて走てゐた、陸地までに三百米である、大丈夫彼等全員は助かるであろふ、我艦の乘組員は逃げる

敵の航海の安全を祈つたのち、その場を去つて次の獲物を索めた。（林海軍報道班員記）

又ある潜水艦は、洋上にてギリシヤ汽船を撃沈したが、二隻の短艇にてのがれ去る船員のため、武士の情を以てわざ〳〵追かけてビスケツト四罐を頒ち與えたこともあつた。

堂々たる涙ある皇國傳統の武士道の具現である、我に抗せざるものや、弱き者をいたわる嵩高なる人道の行者である、昔の戰記にみる武人の振舞そのまゝである。

又マレー海戰に參加せし航空大尉の手記に「翌々日、吾々の一隊は再び激戰場の上空を飛んだ、眼下には何もなかつたやうに蒼い波が輝いてゐた、この波頭へ向けて塔乘員達は大きな花束を落してやつた、最後まで鬪いぬいた英海軍の數千の英靈よ安らかに眠れと、我々一同の心遣りであつた」

又シンガポールでは我軍の手により永遠に名も知られずマレーの土と消えて行く無名戰士の屍を集め埋めて十字架の墓標を建て「英、濠無名戰士の墓」と誌され美しい花や水が供えられた。

捕虜の英將校は感激の涙を湛へて喜んだといふことである。

うるわしく、けだかき皇ら武夫の情誼ではないか。

又香港の米國人收容所の監視に膺つた上原伍長は、自己の給養を割いて榮養物や、ミルクや、煙草などを監禁の人々にめぐみ與えて之を勞はつたので、其の心情に感激した米人は泣いて喜び、その中の二人は、伍長の慈心をたゝえて參謀部に伍長の表彰狀を提出したとのことである。

又アリユーシヤン群島のアッツ島攻略のとき先遣隊長の手記の中に「二人の米國人が通信所から外へ出るとき、外套を許してくれと云ふ「よし」許してやつた、「そのほかに何か欲しいものはないか」と尋ねると「煙草がほしい」といふ「許す」彼等は嬉しさうに机の上にあつた煙草を持つて來る、女もコートを着る、私は「日本軍は非戰鬪員や、捕虜になつたものは絶對に殺しはしない、何も恐れる必要はない、安心せよ」と集まつた米國人等に言渡した、この言葉が通じたのであろふ、皆の表情は先刻までの恐怖の戰慄から安堵の色へと變つて行つた、私は母の手に縋つて泣いてゐた子供の頭をやさしく撫てやつた、まづ子供が笑ふ、ついでその母親は微笑んだ」

子供の頭を撫つる菩薩の手は、純情のいつくしみの發露である、子供も笑ひ母もほゝえむのも最もである、鬼をもひじく勇將と、愛撫せられる敵側の子供の對立は、まさに慈愛を表はせる一幅の畫である。

又同島に敵前上陸せし陸戰隊員は、同島の米人俘虜に煙草を與えつゝいふには「どうも日本人の癖で、人情がうつつてしまつて、可哀そうになつて困ります」と、なんといふ、優しい心であろふ、なんといふ、うれしい言葉であろふ。

之に反し人道とか、博愛とかを標榜する白人の所作はどうであろふ、無辜の避難民を侮辱したり、在留人を一網打盡に強制移轉せしめたり、無抵抗の監禁邦人を射殺したり、爆撃目標となる石油タンクの傍に邦人を監禁したり、白晝病院船を爆撃したり、魚雷攻撃を行つたりする、しかるに之を破り之を無視するのは白人である、如何に平時に於て表面的に眩耀を誇つてゐても、それが戰爭に際して殘虐性に早替するやうでは、眞の文明國とは云はれまい、寧ろ白鬼とも云ひたいと思ふ。

又ビルマ作戰に於て、マンダレー附近より敗退せし支那軍は、焦土戰術を實施し、蔣介石をして「報告によれば第五十五師はビルマに於て掠奪暴行の行爲ありしと聞き、余は寢食安からざること三日に及ぶ」と云はしめておる。

我が皇國には、たとひ赤十字條約がなくても、古來尊き傳統の情け深い武士道

二六、情　誼

艦隊の勇士達は、上陸すると直ぐに隊伍を組んで街を行進した、街を出はづれてもまだ整然たる行軍は續いた、住民達はどこへ行くのだろふと訝んだが、その行進は山裾にある日本人墓地の前で止まつたのだ、南への尊い礎となつて、けふのこの榮と喜とを見ることなく南溟の土となつた、日本人先輩に先づ敬虔な祈りを捧げる帝國海軍なのだ。

住民たちは、わけもなく頭を下げた、世界一慄悍な帝國海軍の持つ一つの表情

がある、弱を扶け力なきものを勞はる俠氣がある、誰もがの胸に慈心がみちみちてゐるのである、之が即ち文化のすぐれたることの具現である、我の勝利は、眞の文化が英米の僞文化に對する勝利ともみることができる。

をいま目のあたり見て感激したのである。

そして英國兵が上陸すると、直ぐにダンスホールへ駈けつけたのと、何といふちがひだと今改めて日本を見直すのだ。（林海軍報道班員記）

二七、克己

上陸して戰勝の喜に心を紊すことなく、先づ先住の同胞の靈を吊ふのは、深き同胞愛の表現であるばかりではない、敬虔な武士道の現示であつて、殘留する同胞の感激のみならず、原住民の心をいたく打つものがあろふ、泉下の靈は定めし泣て喜んでゐることであろふ。

武士は强いばかりが能ではない、情けぶかひのが特色でなければならぬ、嗚呼我が武士道はまだ衰えてはいない。歷史の練磨は崇むべきである。

軍歌の中に「一本の煙草も二人でわけてのみ」と云ふ句がある、戰場に於ける戰友愛をうたつたもので、感傷的にはうるわしく聞ゆるけれども、退いて孰らを考ふるに、之は軍人の恥辱だとも云へるのである。

困苦缺乏は戰場の常であり、豫め期する所である、されば武人は日常から困苦缺乏に堪ゆる習練が必要である、煙草の如きものは、寧ろ武人としては嗜まないことが大切ではないか、嗜まなければ無くとも何の苦痛もない、この心構と嗜とがあれば、いつでも戰場に臨んでも苦むことはない筈である、これは煙草ばかりではない。

人は一度び贅澤に染むときは、習が自から性となつて之を改めることは容易の業ではない、例へば染た布はもとの素地には中々戻らぬのと同じである。

大東亞戰にて贅澤に馴れた米英の將兵と、質素を旨とする皇軍の將兵とは、戰場に於ける行動に於て格段の差異を現はしてゐる。活けるよき教訓であつて尊

ぶべきは日常の嗜みである。

物欲に克ち、誘惑に克つのは、即ち克己である、克己は徳を養ふ第一義諦である、己れに克つことが出來ないものは、敵にも勝つことは出來ない、心の中に湧き起て來る不純な考は、之と刺し違へて斃れる位な意氣込で闘はなければ、之にうち勝つことは仲々難事である。

私は陸軍に志して職にあること三十有餘年、日常簡素の生活に甘んじて不足と不自由とに慣れてゐたので、這回の大戰に方り、物資に乏しく、且經濟機構の改革により諸事統制せられて人は窮屈なり不自由なりと云ふも、自分は昔のまゝ、その儘であつて、苦痛もなければ不滿もない、切符制になつてからは物の配給が公平でむしろありがたいと思つてゐる。

まして總力戰を戰つてゐる今日は、我々の日常生活も戰場生活そのまゝの心構であらねばならぬ、戰場生活とは我が儘を許さぬ生活であり、不自由を忍ぶ生

活であり、餘計なことを差控へたり、しない生活である、たゞ勝んがために總てをこの目的に集中する生活である。

大君のために克己奉公の生活をするのが、時局に順隨する皇民の生活を通ずる臣道實踐である。

二八、自　守

某月某日のこと、東京牛込の陸軍士官學校が火を失して、校舍の一部が燃えあがつたことがあつた、附近の警防團が、消火具を携えて競つて應援に驅けつけた。

消火には、已に一部の生徒が懸命に努力してゐて、手を下す餘地もない、茫然としてこの光景を眺めてゐるもの丶眼に更に映じたものがある、防火壁に隔て

られてゐる隣接の校舎には、泰然自若として授業をつゞけてゐるではないか、窓越に整然たる若武者の姿が見えるではないか、何と云ふ落着た嚴肅なる光景であろふ。

警防團員は感歎して自づから頭が下るを禁じ得なかつたといふことを聞いた。

床かしいことである、學業を修むるものには學業は最も大切である、外界に累されずして修養に專念する靜的の行は、やがて疾風迅雷の動的の素地を養てゐるのである、この沈着と專念とが涵養せられてこそ、將來皇軍の偵幹として愈かゞやかしく又賴母しい限である。

二九、門出

昭和十七年五月三十一日の夜半、濠洲の要港シドニーを奇襲して壯烈無比なる

戰死を遂げ、敵をも感動せしめた、わが特殊潛航艇指揮官、中馬兼四大尉の出發前の一擧手一投手は、今なほ友人、部下達の稱贊、敬慕の的となつてゐるとのことである。

中馬大尉は、今日出發といふ日、一切の手配を終へて己が室に入り熟睡した、親友の某大尉が起しに行くと、輕い鼾をたてゝすや〳〵と寢入つてゐる悠然なる姿を見て、思はず目頭を沾したといふことである、起された中馬大尉は、衣服を更め、伴はれて壯行の會に臨み、恩賜の酒を酌んで訣別を告げた、會後、親友の大尉に「俺に七百圓の貯金があるが、萬一のときは五百圓を部下の大森猛兵曹の遺族にやつてくれ、殘りは弟の學資に當て俺の遺志を繼がせてくれ」と賴み、尙自分が潛航艇に就て研究した一切の記錄を托して將來改良の資料にと依囑した、親友の大尉は、この心情に思はず落涙しつゝ「死ぬばかりが忠義ぢやない、目的を達したら歸つて來い」といふと「いや俺は指揮官として部下

の安否を確めるまでは歸らぬつもりだ、遺言狀は認めないが、俺の今までの行動の一つ一つを遺言と思つてくれ給へ」と強く云ひ切り、悠々として壯途に就いたとのことである。

何といふ落着いた、立派な武者振であろふ。

大事を前にして熟睡するのは、修養のできてをり、悟りきつた定心あるものでなければ能はざる所である、心の焦燥するものは、とても眠れるものでない。

殊に感激に堪へないのは貯金の大部を自己と今夜生死を俱にする大森兵曹の遺族に贈りて、自分の弟のためには薄くしたことは、天晴な武人の清い心構であろふ。

る、貯金の金額は少くても部下を思ふ尊い心が顯現せられて千萬無量の味があ

る、これは凡人にはできないことだ、自利私益に沒頭して時局柄をもわきまえざる輩は、この事を知て穴へでも入りたいと思ふであろふ。

昔德川吉宗は、幼時、紀州にゐたとき、父光貞があるとき、三人の子を呼んで

澤山の鍔を出し、その欲するものを選みとらした、兄の二人は競つて己が欲するものを各一つ宛とつたが、吉宗は手を出さないので、父が「なぜとらぬか」と尋ぬると、吉宗は「殘りの悉皆を戴きたい」と申出たので、之を與へると、我が部屋に持ち歸り、己が近待の士達を呼集めて悉く之を頒ち與へたといふことである、立派な心持である、將たるものはこれでなくてはならぬ、果然、吉宗は將軍の位に昇たのである。

又石田三成は、その居城の住ひは極めて質素であつて襖などは繕つてあつたが、所領の半分を島左近に與へたほど、己が部下を愛撫しておつた。

又可兒才藏は、戰功によつて祿を增さるゝ毎に、多少に拘らず其半分を、股肱の臣、竹內久右衛に與へたといふことである。

古來皇國武人の嗜みは、己れに薄くして部下に厚く、誠を推して惠を施すを以て信條としてゐるのである。

佐賀の葉隱にも「我口に物を食ふてはならず、一飯をわけて下人に食はすれば、人は持たるゝものなり」といふておる。

うまいものは先づ部下に與えるのが武人の嗜みである。

又「部下の安否を確めるまでは歸らぬ」といふことも武人として天晴れな心構である、日露戰役、旅順口閉塞のとき、三度び部下の杉野兵曹長を探した廣瀨中佐の行爲は、今になほ歌にまで殘りて、世人の記憶に新たなる所である、自分だけが歸つてはすまない、乃木大將も「愧づ我れ何の顏あつてか父老に見みえん」と詠じておらるる、この心が皇國武人の信念であるのだ。

又「俺の今までの行の一つ一つを遺言と思つてくれ」といふことも實に尊い言葉である、死に直面してかれこれ云ふたり、辭世を殘したりするのは「自己生存」に猶ほ執着のある徵であつて殊に衒氣や、誇張のあるのは見苦しいことである。

山鹿素行は「平生云ふ所、行ふ所、爲す所、戒むる所、是れ各々遺命なり、遺

言なり」といふておる。

又語類治談には「人の今日の言行、悉く敎戒なれば、臨終の時といへども、別に何事をか云ひおかん、平生の言行、各々其の遺命なり」と誌してある。若き人には珍しい立派な信條であつて敬服の至りであり、又尊むべき敎訓である。なんと雄々しく又立派なる門出ではないか。

三〇、赤き心

嚴寒の北邊に、さては灼熱の南溟に挺身して、傷き病める皇軍將兵の救護に任ずる日本赤十字社救護看護婦の雄々しき姿は、まことに賴母しくも又心强い限りである。

其の一

昭南陸軍病院の前田婦長が内地の友達へ送つた手紙の一節に、上陸後病院に行く途すがら戰禍のあとを眺めつゝ、「戰爭には決して負けてはならないと泌々と考えました、日本の兵隊さんは強い、だけれど、私達が弱かつたらどうなるでしやう、戰爭に勝つためには、男も女も強くなければならぬのです」と。

又「街の樣子などお知らせしたいのですが、到着以來一ヶ月半になるのに、まだ一回も外出を許可されましたが、患者さんをおいて街など歩き廻る氣になれず、たれ一人として出るものはありませんでした。はじめの間は重傷患者が多く殆んど附き切りで精々二、三時間しか眠れない夜がつゞき、兵隊さん達の聲が聞えて眠つてゐる時間さへ惜しく、若しわたし達が眠らなくても生きて行けるのだつたらと思ひまして……」

又「南方名物のデング熱には殆んど全部やられました、だけれども、これは、こちらへ來れば誰でも一度はやるものださうで、高熱がつゞいた後、發疹が出

て心配するほどのこともなく簡單に治つてしまいます、その點、みな經驗者になつたので、これからはデングの患者さんが來られても、どうしてあげればよいかといふことが判り、却つてわたし達の身のためになつたらしい」

內地では、時局を辨えず口實をもうけて名所遊覽や、保養などの行樂に出かける不都合な人もあるのに、新領土に足を踏入れて、あこがれた風土も見たいのに拘らず傷病兵への憐愍と同情から、毫も私心を動かさず外出もせず、專心任務に服する女性のやさしい嗜み、さては異域の疫癘に惱まされながら、かえつてこの病に罹る將兵の看護のため、よき自家の體驗と、理解とを得たことを喜んでゐるのは、何と尊い心根ではないか、此の手紙の文句を讀んで且喜び且感激するのは、出征軍人の家族ばかりではない、一億同胞の誰でもが胸に逼るものを感ずるのである。

又「兵隊さんからはお母さんのやうに慕はれマレー人やインド人からは姉のや

うに敬はれ一日々々が生甲斐のある尊い生活を送つてゐます」と
やさしい眞心に、兵は母と慕はずには居られないであろふ、又住民は、神々しい姿に、尊敬を拂はずには居られないであろふ、そして灼熱の日を日々是れ好日として暑を忘れ、我を忘れ、只管に精進してゐるのは、悟道の人そのまゝの生活である。

昔の高僧にも優る生活である。

之に對する東京陸軍病院の清水婦長の返信にいふ。

「勝たねばならぬそのためには、男も女も強くならねばならぬとの御言葉、全くさう思ひます、現地勤務をして以來、一層深くさう思ふやうになりました、私どもの至らない看護、慰めの言葉に「何これしきの」と、直ぐに元氣になつて下さる兵隊さん「やあ、こんな所まで來てくれて……氣をつけて下さいよ」と逆に私たちを慰問して療養規則を子供のやうに守つて下さる兵隊さん、その時、私は感謝と女性の天職を盡すことの喜を泌々と感じます、女性も強く強

く、本當に強くなつて、傷いた兵隊のおいでの所、何處までも行き、看護が致したいと思ひます、けふ慰問袋を送りました、しかし私は現地勤務を本來とする救護看護婦です、私自身が慰問袋の代りに飛んで行きたい氣持です……」

世には救護看護婦を「白衣の天使」と呼んでゐる、私はこの手紙を繰り返し卷き返し熟讀し味讀して、その眞情にうたれ、これこそ信に活ける菩薩であり、又天使でもあると思ひ、遙かに合掌して同胞としての厚き感謝を捧げた。

其の二

上海兵站病院の竹内（喜代子）看護婦の許え、曾て入院患者たりし笠原松三郎より新年の挨拶狀が來た。

先づ入院中の禮を心から述べた後に

「殊に忘れることのできぬ昨年十月二十八日のあなたの行動——小生は、常日頃、あの時のあなたの言動を「心の軍旗」と思つて、誠實、努力、勇氣、これ

を心の根基として奮闘してゐます、その時の日記を原文のまゝ左に書きます。

十月二十八日快晴なり

今日見た實にうるわしい情景、午後重傷者續々收容され來る、その患者の一人は、足部の傷口が腐り臭氣實に堪へがたく、呼吸困難にさへなるほどなり、救護班の竹内看護婦はマスクもかけず、この傷者を背負ふて病室まで行き一心に看護す、實に親も妻もできぬ働きなり、之を見た小生は、たゞ感泣し合掌して厚く謝す、小生は「大變な負傷者を收容しましたね、さうゆう臭氣のあるものは、衛生兵にやらしたらどうです」と言ふと、竹内看護婦は「私は負傷の程度によつて患者を選ぶことは、お氣の毒でとてもできませぬ、本當にお氣の毒と思へばこそ、看護してあげるのです」と、鼻を衝く臭氣もかまわず手當をしてゐる、之を聞いた小生は、全く赤面した、この時竹内看護婦の眼には涙が一杯浮んでゐた、この瞬間小生は、職務に忠實なる竹内看護婦の誠心と、うるわしい犧牲的精神、その尊い姿に感動して、責任感の足らぬ自分の是れまでの言動を、深く反省させられて、眼頭が熱くなつた、原隊に復歸してより、將校の方々に、戰友に、常に小生はこの話をいたしましたが、その度に、皆深い感動にうたれております、小生も皇國のため一心に働きます、あなたもくれ〴〵も御注意遊ばされて健康を害されぬやう蔭ながらお祈り申し上げます」

誠心任務につくす看護婦と、之に感激する入院の兵士、共に實にうるわしい心情であり、尊い心組である。

百萬言の說法よりも一つの正しい行ひが大切である擧例でもある、卒先躬行の要がこれから生れるのである、進んで難事に就くことが教えられるのである。

上海事變のとき病院の空襲せられたときの話に「コレラの病舍などは、ずつと離れた所にありまして、さういふ病氣ですから、避難も簡單にできませんので、看護婦もどんな時にも、避難どころではなかつたので御座います。「一寸の

間、避難しなさい」と命令を傳へに行つた兵隊さんが、看護婦の態度に感激して「すつかり泣かされました」と報告に來て下すつたこともありましたと、桑原婦長の手記の中に誌されてゐる。

爆撃下に、泰然として任務に就いて動せざる、かよわき女の決意、それも患者を離るゝに忍びない深き同情と、尊き殉職の精神の結實であると思ふ。

花田みき子看護婦は「私はいつでも銃後の方々の心を、殊に若いつはもの達に直接連らなる肉親の方々の心を思ひ、こんなに入院などしてゐられたら、それこそ御心配だろふと、その兵の一人、一人の上に肉親の篤い祈りを聞く思ひがしました。

鐵壁をも貫くといふ心を、遙かに戰野に通はせて居ります日本のお母さま方を思ふとき、我心に故郷のお母さま方の眞情の萬分の一でも備はれ、我が手よ、母の手となれと、願はずには居られませんでしたが、情けないことに不行屆のことのみ多うございました」と心の中を語つてゐる。

この心が爆彈をも怖れず、病毒をも恐れない、強い力となつて傷き病める將兵を勞はつてゐるのである。

其の三

病院船の苦勞に就てその告白の二、三を紹介する。

古屋(糸子)看護婦のいふには「激浪のため思ふ存分、みとり申上げられないことは、私達にとりまして一番悲しい事なので御座います、足元を踏みしめながら、一刻も油斷のできない患者さん方のみとりに精一杯つくす氣持を、波に邪魔されまして、それは、それは、嘆げかずには居られませんでした、どんな苦痛も目前の痛々しい傷兵の方々に比べますとき、どこまでも、どこまでも耐え抜く精神力が湧き上つて參りますのは不思議でございました。

患者さん方は、看護婦さんは何か醉はない注射でもしてゐると申されまして、

よく注射をして下さいと言はれましたが、こればかりは、どうにもできませんでした、どんなに苦しくても傷兵の方々には盡し切れぬものを感じまして、只夢中で御座いました」と。

植田(和江)看護婦は「荒天がつゞくと、私達も酔て數日間絶食のため貧血することがよくありました、それでも任務を勤めたあとで、洗面所でうづくまつてゐますと、部隊長殿が「休めよ」といはれたのですが、矢張よろめいても患者さんの用をするのが嬉しいのです」といひ。

森岡(鶴代)看護婦は「兩手兩足を切斷された患者さんは、本當にお氣の毒で、いら〳〵しておられるのを見れば無理もないと思ひました、時化のとき、自分も酔ひまして、左手で洗面器に吐きながら、三日三晩飲まず食はずで患者さんの背中を撫でたこともありました」といふてゐる。

かような例は一々擧げるのに遑のないほどで、總ての看護婦がみな一やうに同

じ氣持で献身的作業をつゞけたのである。

職務に專心してゐる時には、船には酔うてゐても、酔はないやうに見えることがある、これを何か秘藥の注射でもしてゐるのではないかと患者からあやしまれたのであろふ、船のゆれに轉びながら倒れながら患者の用をなすのが嬉しいといふ心根は千萬無量ではないか、飲まず食はずのかよわき女の身ながら、魂の力で三日三晩も患者を撫でいたわつたのは何と尊いことではないか。

荒い風も高い波も、皇國の女性の强い心は動かすことができなかつた、やさしい情を案ずることはできなつた。

其の四

救護班の前進に方ついて、病室に於ける傷病兵との別れには、數しれぬ美譚が殘されてゐる。

「前進を命ぜられたるとき、病室の隅で砲彈破片創のため頰を半分失くしたあ

とに、腕の肉をとりつけて半ば全快しかけてゐた傷兵が、なにか切りに手招をして竹内看護婦を呼でゐた、行て見ると、たゞ一生懸命に彼女に向つてなんべんも〳〵も頭を下げてゐた、まだ筋肉が強化してゐないため言葉を出すことができないのだ、そのために身振りで感謝と、御禮の言葉を述べてゐるのであろふ。

「まあ、そんなにして下さらなくとも……」

竹内看護婦はそこまで言つてもう言葉も出なくなつてしまつたが、やつと

「お大事に……お大事になさうてね」

と、その肩に毛布をかけてやつた。

病室を一廻して看護婦室に還つて來ると、同僚たちはみな眼を眞赤にしてゐたお別れの言葉を告げながら病室でみな泣いて來たのであろふ。

「別れはつらいものね」誰かゞ云ふと「ほんと、病室へ入るとたゞもう涙が出

て來るの」と、またみんな急に泣き出してしまつた。

若い女性たちのこの涙は、しかし單なる感傷の涙ではなかつた、苦しかろう、痛かろうと傷病兵に濺ぐ同情の念は、すでに救護看護婦たちにとつては母が子へ、姉が弟にそゝぐ慈愛の念と變りのないものになつてゐるのだ、手がけた傷つき病む子を、弟をどうしてそのまゝ殘して發たれやう、その心が涙となつてあらはれて來るのだ。

患者に對する彼女たちの心情——それは皇軍將士にも劣らぬ赤十字の鐵の規律のなかで培はれ育てられて毅然たる美しさと、祖國愛と愛情とに燃えさかつてゐるのだ、だからこそ患者の便器も汚物も、彼女たちには決して汚ないといふ觀念を與へない、たゞ全治、平癒への赤心が手を動かし足を動かすばかりなのだ。（赤十字旗より）

婦人だから感情にさとくて泣くのだと思つてはならぬ、誠心の情がうつゝてゐ

るからだ、清き同胞愛の涙である、どうして泣かずに濟まされやう、戰場の一隅をあやどる潤でもあり、又た光でもある。

其の五

島根縣より派出せられた、日本赤十字社救護班の看護婦長八幡サウノの父茂氏が、十數日前鄉里隱岐島にて病歿せられたことが、救護班へ報告されて來てゐたが、父茂氏の遺言もあり、又班の人々も婦長の悲歎を思つて、しばらくその訃報を秘めてあつた、班が愈々上海から南京に移動する日の逼つてゐたので、遂に之を婦長に知らした、さすが瞬間色を失つたが、報知を告げずに控えてゐたことなどを聞きて

「さうでしたか、ありがとう、とても嚴格な父でした、私が出發するとき、もうすでに豫期してゐたのかも知れませむ、くれ〳〵も見苦しい行ひはしてくれるなと言つて、これを私にくれました、御覽下さい」

と懷から一通の書面を取りいだした、その書面には

一、國のため赤十字にさゝげる身なれば、獻身的にその職務に忠實なれ。
一、職務柄、親切と愛情の持主たれ。
一、上を敬ひ、下を愛せよ。
一、不滿あるときは、その許の至らざるに起因すると思ふべし。

右父が好む煙草を禁じて戒む、諒得あれ

茂

さうめ殿

婦長が門出の際、軍國の父として至親の慈愛と、烈々としてほとばしる至情をこめて、この重い使命につき訓戒を垂れたものであつた。

ことに、好ける煙草を斷乎として禁じて此の言をなす決意は、肺肝に徹する思ひがする。

門出の訓言は、かなしくも遂に遺言となつたのである。

傳え聞いた同僚の看護婦たちも、いづれも感激の涙に咽んだ。

訓言の言葉は短きも、やがてこれは看護するもの全般の諭えである、ことに不滿あるとき反省を促してゐるのは謙讓の尊い婦道への教でもあるのだ。

皇國の親心はすべてこれである、そしてこれは歷史によつて磨き出されたものであると思ふ。

三一、無名の人柱

マレー、コタバルに住みし福岡縣の谷清吉氏は、在住華僑の壓迫を受け、ある日、八歳の娘は山中に拉致せられて虐殺せられたが、英官憲は之を默視して救はなかつた、當時、二十歳であつた兄の豊は、妹の非業の最後と英官憲の無慈

悲とを知り、奮然として憤り、感ずる所あつてコタバルより姿を消し、爾來數年間ケランタン、バアン兩洲にて「ハリマオ」(ハリマンハ虎)と稱せられ欝蒼たる山岳地帶を馳驅して多くの部下を擁するに至つた。

兩視は遂に彼を勘當して福岡に歸つた、「ハリマオ」は住民及部下の信望厚く昭和十五年二月南部泰に遁れたときは忽ち村長に推された、大東亞戰が開かれ皇軍の進出するや豊は感激の涙を以て日章旗を仰ぎ、祖國への忠誠の念に燃え、部下と共に皇軍に投じ、我が悲願滿願の日到れりとなし、自から卒先挺身し、在住三十年の蘊蓄を傾注して皇軍のため或は情報を蒐め、或は敵の通信を妨害し、或は道案内をなし、或は宣撫に從ひゲマス附近にては抗戰の無意義を說いて千八百を歸順せしむるなど、我が作戰に協力し奮闘したが、二月六日ジョホール・バハールに入たとき、遂に病床の人となつた、ジャングル踏破の苦闘のため、惡性のマラリアに罹つたのである、病床に母を忍びて訴へて云ふ

には「お母さん、僕は日本人として立派にお國のために盡したと思ひます、今までの不孝を御許し下さい、お國のためにつくすことが最大の孝行だと思ひます」と、此の眞意は福岡の母の許に通達せられ、母の喜びの返信がもたらされたとき、豊は感その極に達し母の手紙を抱きつゝ泣き伏した、この頃より病勢は益々惡化し、シンガポールの病院に移され加療を竭したが、皇軍入城の凱歌を枕頭に聽きつゝ短かい苦難の一生を終つた、豊は五尺そこそこのあまり頑強でない體軀の持主であつたが、その氣魄と膽力とは實に天晴れであつた。（藤原少佐の談）

日清戰には金州にて殉節せし三崎（山崎、藤崎、鐘崎）の烈士があり、日露戰にはハルピンに忠魂をとゞめし横川、沖の志士がある、一朝君國に事ある毎に身を以て難に殉ずる武人以外の丈夫の烈々たる事蹟が、相次で展開されるのは信に賴母しいことである、今亦た圖南の人柱にこの壯夫がある。

三二、母

一死殉忠の念に燃え鐵火の下に猛進力闘せし戰士も、一度び創を被つて生死の境地に呻吟するときには、幻のやうに浮み來るは慈母のことである。

過ぐる西曆千九百十四年の世界大戰に方り、歐洲の戰場に於ける病院にて、創のため殪るゝ勇士の最後の叫びは、「お母さん」であつたことは、感傷的に感ぜられたが、其後事變に當て注意を拂つてゐると、左の事實を知るに及んで、時の古今、洋の東西を論ぜず、人情の機微は、その揆を一にすることが判つた。

一、支那事變、向城の戰鬪にて腹部二箇所に砲彈破片創を被りし中山上等兵は、開腹術後病床に横はりて「お母さんは今晩心配してゐるでせう」と言へば、

傍より戰友が「內地にはまだわかるものか」と勵ますと、「今晩お母さんは變な夢をみて心配するでせう」と、己が創よりも內地の母のことを心配してゐるらしく戰友の言は耳に入らぬものゝやうに獨語して目を閉ぢた、戰友は最早何とも云はなかつた、沈默の中に夜が更けて行つた。

二、又た太原攻擊の頃、石家莊野戰病院を音信れた內地慰問使の手記に云ふてゐる。

續々と火線より搬び込まれる負傷兵は、軍服の上から假繃帶をした兵、顏面一面に血汐に彩られた兵、何れも繃帶の白地がその跡を止めぬほど眞赤に染まつて軍服は千々に裂け、靴はバッカリと穴を明てゐる、軍醫は勇士の上に覆はれたる毛布をはぐつた、咄嗟に私は思はず面をそむけた、軍醫は素早く鋏を以て勇士のズボンを左右に截り開いた、うつと私は思はず息を呑んだ、つい先刻まで張詰てゐた氣も流石にたぢろぎ、繃帶の卷替を手傳ふ勇氣さへ

失せた、突然「軍醫殿」勇士が呼だ「何か」「自分は今故郷の母に激勵されてゐる夢をみました」「さうか、で、母親は何と云ふたか」「はい、お國のためにしつかりやるんだぞと云つて消えました」「うん、お前のお母さんは偉い人だよ」「はい、自分もそう思ひます」「創は心配することはない、直ぐ治るから安心せよ」軍醫は慈父のやうに溫く優しく訓すのだつた、頷いた勇士の眼に涙が一滴、二滴流れ落ちた、勇士は靜かに眼を閉ぢた。

三、病院船と云ふ書のうちに云ふ「重症患者には船の動搖が最も禁物だ、收容する時には左程にも思はなかつた一人の患者が船の搖れ出して以來、俄かに惡くなり、今は口を利く力もない、拭ても〳〵汗がにじみ出て生死の境を彷徨してゐる、患者はどうにかして覆かぶさつて來る黑い影を拂ひ退けやうと、もがいてゐるらしく何となく身振にも苦鬪が窺はれた、ひとしきり重い沈默が續いた「お母さん」と微かに叫んだ、滿身の力をこめて口に出した言

葉だつた、然し、瞬間全身の氣力は失せて遂にそのまゝ萎えてしまつた、何萬の敵をも物ともせず、戰ひぬいて來た彼も、最後の腦裡に閃くものは二十何年慈しみ育てゝくれた尊い母の姿であつだろふ。

四、又日本赤十字救護班の花田看護婦の手記の中に

「どなたかの歌で戰場で殪れました時のことを詠み

すめらきの萬歳さけひのこりたる
息に母よとよひてたふれぬ

といふのを拜見しましたが、傷つき病む將兵の胸をつねに去來し慰め勵ましてゐるのは母の面影でございませう、亡くなられます時には「お母さん」と云ひますのを度々聞きました、いつも優しい母の姿がしつかり刻みつけられてゐるのです、いつの世にも、母こそ人の子の光です」と誌してある。

五、北支永定河の激戰に奮闘して戰場に散華せし岡本部隊の青年士官、立山中

尉は、血汐に泌む軍衣のかくしに慈母の寫眞を納めており、その寫眞の裏には萬年筆にてお母さんの字を無數に誌してあつたと云ふことである。

六、昭和十三年十二月二十六日重慶爆撃行に方り巨彈を投じて敵を震憾せしめて歸るとき、柴田中尉機は故障を起して編隊より離れ、高度もズン〳〵と下り、密雲の中に入つた、こゝらあたりは名にしおふ峨々たる山嶽地帶である機を輕くするがためあらゆる物が投げ捨てられた、中尉はなるべく明るい方を目ざして一生懸命に翔てゐる、その時、重疊する密雲を瞳てゐる中尉の眼にチラと年老た女の顔が映つた、雲間を「こちらへ、こちらへ」と招いてゐるやうである。

「アツお母さん」中尉は思はず叫んだ。

亡き母親が招いてゐる、機はやがて密雲を破つて雲間を出た、一尺を誤ればでであつた、亡き母親の導きに違いなか機は山に衝突したであろふ、危いこと

つた、中尉は合掌して感謝した。

七、ハワイ海戰に方り眞珠軍港を猛襲して生還せし海の荒鷲の海軍大尉の談に

「敵の對空射撃がブンブン鼻先を掠めて突きぬけるのに閉口し、もう駄目だと觀念したが、その瞬間には不思議におふくろの姿がありありと眼前に浮びあがつて來るものだね、僕のおふくろは毎朝神社に參つてゐるさうだが、それが神社の前に手を合せてうづくまつてゐる姿なんだ、本當にありがたいと思ひ、もう死んでもよいと思つて氣が輕くなつた」といふと、傍の中尉のいうには「本當ですね、もう最後だと思つて觀念した時には母親の顔が、ありありと浮び上つて來る」と。

八、印度洋を荒し廻りて基地に歸つて來た潜水艦長は昭和七年上海事變のときには特別陸戰隊の鬼小隊長として閘北を護つた勇士であるが、その話に「僕の母は上海事變のときは毎日鎭守樣へ跣足詣をして居た、若い僕はそんなこ

とを何も知らずに只戰つた、歸國して初めてその話を聞いて驚いた、今も、あゝ、今日もあの年老た母が鎭守樣へお詣をして居るだろふ」と、暗然として眼を閉ぢて深き沈思をした。

母の感銘の深くして大なること以上のやうであり、之に類する實例は枚擧に遑がない、母たる人、母たるべき人はこれを讀んでいかなる感想を催すであろふ。

昔普佛戰爭の終りて凱旋のとき、國民の代表がモルトケ將軍に感謝して其功を讃えしとき、將軍は「之は決して余の功績ではない、余の最も感謝に堪へないのは今日の國民を産み、之を立派に育て上げた母達である、國民はこの母達に感謝せなければならぬ」と、涙を流して答へられたといふことである。

母の大切なることは申すまでもない、然るに母たる教養は單に惰性に委してありはせんか、學校に家庭に果して剴切、周到に行はれてゐるか、

學校教育は男子と課程がよく似てゐて不必要な學科や、無駄な時間が浪費されてはゐないか、智育に偏して實際の訓練が忽になつてはゐないか、實習の少い教育は價値が少ない、又情操は養れてゐても、意志の鍛練は行届いてゐるか。家庭の躾も只學校まかせであつて放漫に流れてはゐないか。

古來の胎教の如きは舊慣として過眼されてはいないか、我子を剛健に仕立てるやうに母の躬行を謹むことはよく行はれてゐるか、質實を訓ゆべき母の服裝は、華美に流れてはいないか、禮儀や、世間の義理や、謙讓の美風は的確に仕込まれてゐるか。

古來「母となることは易いが、母たることは難い」と云はれてゐる、結婚さえすれば單に母となることは容易ではあるが、「眞の母」たる母となることは、仲々むつかしいのである。

獨逸のヒツトラー總統は先頃、「獨逸の婦人よ、家庭にかえれ」と呼びかけてゐた、邦家の將來を想ふ意味の深い叫びである。

吉田松蔭も云ふてゐる「男子何程剛膽にして武士道を守るとも、婦人道を失ふときは、一家治まらず、子孫の教亦廢絶するに至らむ」と。

母の感銘の深厚なるにつれ、教育家も家庭も、皇國將來の良妻、賢母を長養するために再思、再考せねばならぬと思ふ。

附記

今夏文部省より女學校の外國語を整理して家事、保健など實生活に必要なる科目が增多されることになつた、嬉しいことである、革新の一歩が進められたのである、當事者はこの精神に則つて大局的に大乘的に、舊慣に捉はれず、因習に惑まず、更に一歩を進むることが必要と思ふ、斧鉞は加えられたが皮を割つたに過ぎない、その髓にまで達するやうにしたい、そして國策の嚮ふ所に一致して、その效果の擧がることを祈念して休まない。

三三、一念不生

某造兵廠の少年工、加藤茂松は、出勤の途次、不幸交通事故の爲め兩足に重傷を受け、容體は刻々と革まつて死が逼つてゐた、そのときこの少年は工場の制帽を自からの顏に載せ「班長殿、今日は七十しか上りませんでした、濟みません」と謝言をつぶやいた、枕頭に居た母は、愛兒の死に直面しつゝ「茂松や、お前は軍人さんでこそないが、立派な兵器を造る御國の工員です、天子樣の萬歲を唱へて死んでお呉れ」と傷ましくも健氣に激勵すれば、並居る同僚は、その子、その母の神の如き心に哭いて感動し、いづれも進んで輸血を申出てた、又工場長は「どんな體になつても職場は溫かく、お前を待つてゐるぞ」と、慈愛にこもる激勵の言葉を與へた。（八田陸軍大佐談）

少年ながら死に直面しつゝも、猶ほ制帽を離さず、謹語にもその職責を語るのは、畢竟その一心が職場の責任に滿ち充ちてゐる徵佐であつて、純眞無雜の尊い淸い心根である、是れでこそ造られたる兵器に魂が通てゐるのである、兵器に生命が賦活せらるゝのである。

又我が愛兒をまのあたり失はんとして淚をかくし、雄々しく勵ます母の心根は千代萩の淺岡にも劣らぬ堂々たる軍國の母の姿である、我が皇國傳統の光に輝やく母の姿である。

尙「どんなになつてもお世話をするぞ」と慈愛に滿ちた上長の言動、さては競て血を捧げんとする同僚、いづれも至心至情の發露であつて感激、稱歎、涕淚を禁ずることができない。

これは一工員の場面であるが、今や國難に處する生產方面各工員の心も、姿も皆是のやうにあらねばならぬし、亦た必ず是のやうであると信じたい。

三四、おはつ

大東亞戰下、軍需の充實と、生產の擴充のため石炭の增產が强調せられて各地の炭礦は懸命の增堀に努力を拂つてゐる、九州の住友炭礦もその一つである、ある一女礦夫は、病身の夫に代りて採炭に從つておつた、日々採堀する炭は一定の箱に容れられて、夫れに採堀者の姓名を附着するやうに規定せられてあつた、これは採炭量によつて賃金の多寡を定める標準であるのだ、然るに日々姓名札のない一箱がある、監督が不審に思ふて調べると、それは一女礦夫の仕業と知れた、そこでその女礦夫を呼んで尋ねた所が女工が云ふのには『先づ「おはつ」を神佛に捧げる心組にて堀り初めのものを別の箱に納めたもので、お供えであるから名札を附けないのだ』と應へた。

他人の爲た仕事までも、己が爲たと云ひたがる現代には、珍しいうるわしい話である、然もいわゆるお初を無名のまゝ神佛に供ふると云ふのは、何と尊い心根ではないか、少しのものを寄進をしたり、獻納すると、その名が新聞に載たり又は張り出されるのを得意とする人が多いのに、教養に乏しき一礦夫でありながら、實に見上げた行であると云はねばならぬ、かくてこそ眞心は神佛に通ずるのである、神佛も必ず悅んでお享けになることゝ思ふ、庭訓往來と云ふ書物の中に「注文に載せられずといへども、進じ申す處なり」とある。注文通りに努力するのは、月並であり、お義理的である、吾等は注文より以上に更に一步を進める心掛が肝要である。

これこそ、增產の極意であり、秘訣であると思ふ。

三五、人具一如

ある工場に働てゐる一工人に應召の召集令狀が交付せられた、すると、その工人は、自已の擔當する仕事を急いで仕上げて、受持の器械を精細に調べて手入を施し、綺麗に磨きあげ、油を注ぐべき所には給油をなし、工作具や、工作品を整理、整頓したる後、恭しく脫帽してその器械に敬禮をなし、工場を出て軍門に急いだといふ實話がある、なんとうるわしい譚ではないか。

器械をわが親しき友、よき協力者として活けるものゝやうに取扱つたよい話である、別れに臨んで器械や道具に敬禮をしたのは、今日までよく協力して働いて呉れた、ありがとう、どうか今日から人が代つても私と同じやうに協力して呉れよと心の中にて念じ且つ告げたことゝ思ふ。

かくしてこそ器械にも生命が賦活せられ、かくしてこそ作業能率も高揚せらるのである。

かゝる工人の誠心誠意の行爲は、いかばかり他の工人に感激を與えたか想像するだに嬉しいことである、一工人の善行は數時間の訓話や講演よりも有効である、活ける教訓である。

工場は良き製品を作る所であるばかりでなく、亦た良き人をも作る所でなければならぬ、工場が即ち道場となることが望ましい。

今日我國の青少年の過半數は、國民學校を終ると工場、事業場に入つてゐる、工場は明日の中堅國民を練成する最大の殿堂であり、育成の道場である、こゝに於ては其道に熟達する腕を鍛ふと共に、眞心の立派な人が養はれなければならぬ、この自覺が必要だ。

古き因習の眼を以て今日の職場を見たり、昨日の利潤を先にするやうな考へを

以て今日の職場を導いてはならぬと思ふ。

工員も亦た仕事の中に教訓を求め、勤務の裡に人格を錬て行かねばならぬ、それには眞劍味と眞心と工夫とが大切である。

附記

生産の增强が高唱せられ、其の要請は軍需品に於て莫大なる量である、之に適應するのに工場も擴張し、機械も增設し、人員も增加しなければ出來ない相談と、簡單に考ふるのはどうかと思ふ、人も機械も增すに越したことはないが、增すこと少くして大に增したと同樣の效率を擧ぐるやうに工夫することが必要ではあるまいか、聞く所によれば、ドイツは工場の勞働力は約三割も減じてゐるが、生產能率は五割も增してゐるとのことである、羨しいではないか、それは、いはゆる能率增進の對策が、適時適切に行はれてゐるからだと思ふ。

平生產報會長の話によると「同じ設備と勞力とを持つ二工場でありながら、甲の工場は、乙の工場の二倍の生產高を擧げてゐる事實があるが、調べてみると、甲工場長の卒先躬行と、能率增進への細かい心遣をしてゐることが、職工に反映して良好なる成績をかち得てゐることがわかつた」といふことである。之につけて想ひ出すのは、第一次歐洲戰爭のとき毒瓦斯の創意的使用を工夫したドイツのハアバアト博士が、戰後我國の工業を視察して云ふたことに「日本の工場の經營者は優れており、下級の勞務者も忠實で申分はないが、中間の指導者はどうも教養が十分でなく、人格もよくないやうに思ふ、若しこの階級の教導が向上したならば、日本の工業は、今日よりも一層の發展を遂げるであろふ」と。

軍隊でも、直接兵に接する下士官は、大切な役割を演じてゐる、將校も立派に教養せられてゐなければならぬが、下士官も亦た、立派に教養せられ

なければならぬ、その意味で、之が優遇や、教養の向上に深い注意が拂はれて、特別の學校までもできてゐるのである。

産業方面にて企業者と勞務者が、時局に目覺めて國家焦眉の要請に心身を打込んで眞劍な努力を拂ひ、能率を昂げることも必要であるが、經營の上に於て直接職工を指導し、誘掖するいはゆる中間階級の教養や、取扱は果して適正に行はれてゐるかどうか、考えなければならぬ問題であると思ふ。

三六、親切

開戰四年の春、獨逸のヒットラー總統が國會に於て國內戰線の團結を強調して獅子吼するや、之に呼應して五月には全國一齊に「親切運動」が開始せられた。

街頭には「親切により早く良く」とか、「ユーモアと親切で艱難突破」とか「この際第一の義務は思ひ遣りのある親切」などの標語が貼り出された。

ゲッペルス宣傳相の布告に左の一節がある。

「各自が一生懸命働きさへすれば、戰爭に勝てるというのではなく、どういふ風に働くかといふところに重要なる意味があるのである、親切、謙讓こそ人間共同生活を穩かにし、また成果を高からしめるうへに缺くことの出來ないものである、市民が互に他人のことを考慮することは、戰時下なればこそ、平和時より一層その必要が痛感される、思ひ遣り、謙讓、親切などこそ、雲間をもれる太陽のやうに、灰色の日常生活を明るくするものである」

ベルリンにては、ある職業を指定して、四週日間に最も親切なる人を夫れ〳〵十人宛投票にて決定し、賞典を與ふるの企が始められたといふことである。

戰時は民人の神經が尖がり氣が荒くなり、且つ經濟統制や、通貨の膨脹や、生

活の刷新や、物資の不足や、切符制度や、消費の節約やで、慳貪や、横柄や、不親切が社會生活の上に萌して來たものとみえる、人と人との間には不快な感情や、爭論も起つてゐるのではないか、これではならぬ、戰時には特に人の和が最も大切である、相互に慈心を以て相向はねばならぬ、即ち思ひ遣りや、謙讓が要求せらるゝのである。

生活に「潤ひ」と「温み」を齎すものは親切である、言葉の親切、行の親切である、かくして急がしき時にも、和やかな氣を釀し出すことができると思ふ。

獨逸のことばかりではない、省みて、我國の現況は果して如何であろふ。

交通從業員の態度は、混雜を極むるに從つて乘客に對し果して適切であるか、商店員の言動は、物の乏しく、數の少きに應じて、顧客に對して果して適切であるか、どうか。

和を以て信條とする我が大和民族の玉にくもりはないか、他山の石をかりて磨くことは情けないことである、銘々に反省し相互に相戒むる必要を痛感する。

三七、開眼

開眼供養と云ふことが佛教で行はれてゐる、眼の形態は具えてゐても見る力のない佛に、魂を入れることを喩えたものである、ポール・ウアレリーは「人生に於ける最初の重大なる事件は物を見られるやうになることだ」と言ふてゐる。

我國人の多數は、先頃まで我國の直面する國際情勢に就てはあまり皇澤になれ過ぎてよく目が開けておらず、たま〳〵見えても極めて近視眼的であつて、主

に小さい〳〵自分のまわりのことや、國内の限局する部面のことや、近隣のことや、ホンノ目先の事にのみ氣が注がれて、英米の東洋及我國に對する策謀や、企圖や、欺瞞や、横暴などには無關心のものもあれば、視ても見えないものもあつたし、見ることは見てゐても、目を外らしたり、又は故意と見遁したものもあつた、ハツキリと眞劍に心をこめて見つめてゐたものは少なかつた。

日本は最早昔の日本ではない、東洋に局在する日本でもない、日本の動きは響のやうに國際情勢にひゞき、國際情勢も常にひし〳〵と我等の生活にまでも及んでゐることをよく知らねばならぬ。

然るに昭和十六年十二月八日、米英に對する宣戰の詔勅が煥發せられたとき、我國人はハツトすると同時に晏を移さず、布哇への猛襲や、香港の攻略や、マレーへの進攻や、フイリツピンの席卷や、蘭印の占領や、ビルマの戡定や、之に伴ふ印度、濠洲の戰慄など、矢繼ぎ速やに展開せられて、皇民は米英の東洋

侵略のすがたをまざ〳〵と認識し、一般の考えは以前とはガラリと變りて、大東亞戰の意義をシツカリと理解し、國を擧げて私を後にし公を先にして、米英打倒の念が火のやうに燃え出した、之が即ち開眼である。

一部のものは已に二十年前から眼を開いてゐたが、大多數の眼は遲まきながら漸く開けたのである。

目が開いたばかりではなく、視野も亦た廣くなつた、北はアラスカより西は東アフリカに、南は濠洲にも及んで、今迄聞いたことのないやうな地名を、子供までが口にするやうになつた。

これ迄は、皇國の地位をさまでにまで考えてゐなかつた人々は、今や東亞における大切なる役割を自覺するやうになつた。

然しこの開眼供養に拂つた値は、人的に物的になまやさしいものではない、信に尊き膏血と流汗とを以て彩られたる嚴肅なる開眼式であつた。

三八、革新

振古未曾有の大戰爭を遂行しつゝ、我國は新體制を整備しつゝある、特に經濟機構の革新が着々として進捗しつゝあるのである、新體制を確立するには之が先づ緊急であるからである、古き自由主義的又は私利獨占的打算的の機構は、最早許さるべきでない。

之がため都市にては中小商工業者の間に嵐が吹き荒てゐて、嘆聲や、悲鳴さへ聞ゆる、然し當局は已に之を豫期して、之が救濟のため資金の融通や、轉職の斡旋や、あらゆる救助の手が次ぎ〳〵と考究せられ差延ばされてゐる、父祖傳來の店を閉づることは辛いことである、住み慣れた家居を離るゝことは哀しいことである、然しこゝに、ふり返つて考えなければならぬのは、明治維新の時

である、御維新はその名の如く古き封建制度を捨てゝ新しく御親政に還元したのである、階級制度を打破して四民平等に複歸したのである、之が爲めにその時に最も苦辛を嘗めたのは武士階級であつた、領地を　天皇へ返還し奉るは申すまでもなく、邸も昔のまゝでは住むことはできず、殊にその最も矜とした腰の刀は脫去せねばならなかつた、即ち物質的にも精神的にも非常な衝撃に遭遇したのである、然し武士は默々として大勢に順應し潔よく天下の號令に服したのである。

あゝ武士の魂として常住坐臥我身を離さなかつた太刀を、かなぐり捨てる心持は、在來の氣構からして自分を賤しきものゝ位置に、おくことゝなるので、精神的には奈落の底に陷る苦であつたろふと想ふ、財や物を失ふ心持とは格別の相異があるのである、加之ならず世襲の秩祿には離れ、愛馬には別かれ、累代の家人とは袂を分かち、住み慣れた邸を去つて、今のやうに救濟の手の十分に差

延られてゐない世の中を、昔見下してゐた町人共から、昨日にかわる今日の姿を、むしろ蔑みの微笑を以て送られながら忍び忍んで各々新しく活きる途を探し求めたのであつた。

個人としては信に不憫ではあるが、公のためには休むことを得ない革新であつた。

この苦しかつた心情を今の人はよく察しなければならぬと思ふ。

偶々下級の武士は、既に昔から竊かに内職などによつて自活の方法を研究し、些細ながらも蓄財の準備もしてゐたが、大身な武士ほど、この心構ができてゐなかつたのみならず、金銭を賤む氣質から、相次いで落魄の途を辿つて、哀れな流轉の姿を曝すものさへ現はれた、今廣き昔の城下町に、昔ながらの邸に安住してゐる人は極めて稀であつて、菩提寺の先祖の墓石さへ無縁の悲運に陷つてゐるものさへある。

革新は必ず犠牲を要求する、犠牲なしに革新は成し遂げられない、芽出度い、出産には必ず陣痛がある。

明治維新は、皇國建て直しの革新であつた、封建制度の革新であつた、このとき犠牲となつたのは武士であつて、武士は涙をかくし、歯をくひしばつて之に堪へた。

今や世界の新秩序の先驅をして皇國に革新が起つた、特に經濟機構の革新である、商工業者はいかに辛くとも、泣き言や、歎聲を漏してはならぬ、昨日は人の上、今は我身の上に降りかゝる運命である。

毅然として之に耐え之を仕遂げねばならぬ。

まして救濟の手段がいろ〳〵講じられつゝあることは、昔と較べてまことにあり難い、勿體ないことである、感謝しつゝ奮起せねばならぬ。

或は不滿を抱き、或は不平を唱ち、敵側の企圖しつゝある國内人心の離反、擾

亂の策謀の思ふ壺に嵌つてはならぬ、英米の宣傳の目標人物中にはこのやうな轉出業者が指定されてゐる。

「士魂商才」の要求せらるゝこと、今日より急なるはない、この荒浪をのり越えるには士魂で行かねばならぬ、士魂なるかな、士魂なるかな。

附記

歐洲第一次大戰のとき、ゾンバルドは、「商人と勇士」といふ書物を著して、英國人とドイツ人との精神を比較してゐる、英國人は商人的根性を以て打算的に戰爭を指導せんとし、敢爲堅忍の戰鬪精神に缺けてゐることを指摘してゐる、以て鑑とすべきである。

三九、貯蓄

南方共榮圈內の諸國の民族は、貯金をする餘裕も與えられず、又貯金をさせないやうな仕向けのため、一般大衆の貯金は少なく、永い間搾取と壓迫とに諦めて、只その日を辛ふじて送つてゐる、たよりない情けない情勢である。

然るに我皇國は、皇民の貯蓄が年毎に、日增しに增滋して、現に支那事變以來已に五星霜、一文も外國の援助を仰ぐことなく、自力で以て克く之を償て來たのみならず又更らに大東亞戰爭を開始し、莫大の戰費を要すると共に、雄大なる大東亞共榮圈の新建設に着手してゐる、實に雄々しいことである。

然し戰局は益々擴大し、戰期は愈々長びく傾向にあつて第一線の軍需に、國內の生產擴充に、益々資財が要求せられ、之が調達の資金を整備するがため貯蓄が要望されてゐる。

この國步艱難の秋に方り、吾々はいかにして貯蓄の實績を擧ぐべきである乎、これには色々の工夫や、考案が廻らされねばならぬが、根本の精神は、「親が

子のため」にする皇國傳統のうるわしい心組をそのまゝに轉用したいと思ふ。

親は只我子の成人するやうに、我子の立派になるやうにと、骨身を吝まず努力をして自分のことはできるだけ節し、うまいものは子のために蓄へ、よきものは子のために殘し、萬事を只我子のために捧げつくしてゐる、「女は弱いが、母は強い」といふことは、親となつて子のために捨身になつてゐる女の強さをいふたのである。

又親が子に盡してゐる氣持は、決して感謝や報酬を求めていない所にうるわしい所がある、然し我子の行末に對し光明は期待してゐる。

今直面しつゝある國難はやがて榮え行くに先立つ苦であつて、前途には共存共榮の榮光が燦然として耀いておる。

吾々は親が子にしてやる心組で皇國のために貯蓄をすれば、必ずできないことはないと思ふ、餘裕がないからとか、苦しいからなどゝは云はれないのであ

る、餘裕はなくとも、苦しくとも、親は我子のために何物をも忍んでつとめてゐるではないか。

北極探險家のアムンゼンは、或人からその壯擧を稱えられたとき「世の中に不可能といふことはない、必ずできる、只規律と健康が大切だ」といふたとのことである、太田正孝博士は、貯蓄をするのには愛國心と、規律と、健康の三つが必要だと提唱されてゐる、

皇軍の強いのは純忠の精神と、嚴肅なる軍紀と、困苦缺乏に克く堪ふるやうに訓練せられたる體力である、銃後皇民も軍隊と同じく、この三つが必要であつて、報公の念が盛であれば私を後にして貯蓄をする心持になれるし、生活樣式を工夫し規正すれば無駄を省いて自づから餘裕を生ずることができるし、又常に健康であれば、活動能力に富みて收入も增加するし、消極的な醫療費を節約することができるといふ剴切なる警告である。

これもよし、あれもよし、然し根本は、純一無難、只一筋に私を後にし只管大君のためにする燃ゆるが如き親心が望ましいと思ふ。

四〇、深耕

食料増産のため、畑の耕作には、なるべく深く耕せと提唱せられてゐる。深く耕すの利のあることは、已に古よりよく人の知る所であつて、支那の孟子も「深く耕し易く耨る」と說いてゐる、即ち耕すにはなるべく深く堀り下げ、土をよくおこすこと、草を刈るには、淺くしておけと云ふのである、農事の戒である。

深耕について支那に面白い昔話がある。

西國に一農夫があつて平生耕稼に努力してゐたが、その口癖に「自分は澤山の

黄金の寶を持てゐる」と云ふだけで、その貯藏してある所を告げなかつた、しかるにその農夫が重き病に罹つたので、子供等が病床のまわりに集て、その「黄金の寶」の隱してある所を尋ねた、すると、その農夫が答えて云ふには「自分は田畝の中に穴藏を造つて埋めておいた、その深いのは數千尺にも及んでおる、我が死んだならば、お前方は堀て之を取れよ、他人に取られてはならぬ」と、云ひ終つて永眠した、そこで子供等は、爭て田畝へ行き鋤や犁を以て千畝の地を盡く堀り返した、どうしてもその在りかが判らなかつた、しかしその年にはその堀返しが效があつて、作物がよく繁茂してその收獲が平年より多かつた、子供等が悟つて云ふには「田畝に寶を埋めておいたと云ふのはこれだ」と手を拍つて喜んだと云ふことである。

古から「人は自からの力によつて生活せねばならぬ、力を出さずに金によつて座食してはならぬ、力によつて食ふときには盡くる時がないが、金によつて食

ふときには必ずつきるときが來る」といふておる、遊閑の警めである。

又よい事は、存外手近な所にあるのに人が氣のつかぬものである、丁度、まつ毛は眼の前にあつて長いけれども見えないのと同じである。

ある村で樹の枝がさし出て日當りの惡い所を、その村の青年が枝卸をして日蔭であつた空地に豆を蒔たところが、その年、十石餘もとれて、それから味噌や醬油を造つたところ、その村の人の三年間の需用に十分間に合ふことができたと云ふことである。

勞力を吝んではならぬ、人にたよつてはならぬ、自分で自分のことを努めねばならぬ。

今では又た休閑地の耕作が奬められてゐる。

昔豊臣秀吉は、朝鮮征伐のとき、名護屋に本陣をしいてゐたが、陣屋の空地に野菜を栽培さたと云ふことである。

又加藤清正は、朝鮮に出征して駐軍するや戰場耕作を盛んにやつて自給自足を計つた。

又楠木正成は千早城の籠城のみぎり、豆や粃のもやしを作つて野菜の代用にしたこともあつた。

食糧の增産には、又工夫と創意が必要である。

附記

食糧增産には、土と親しむ副産的の利得がある、人は土に親しむことにより强くなり眞面目になり、土と離れることにより弱くもなり輕薄にもなるものだ。

休暇を活用して都會の人々が、農繁期の田舍に援助にてかけるのは、まことに結構なことである、かくて土に親しみ、一粒の米、一莖の野菜のありがたさを悟ることゝ共に、清純なる田舍の環境にふれ、素朴な農人と接し

て心の洗練にも大きな感得があることゝ思ふ。

四一、謀略

米國のサンガー夫人が、米國から特派（？）せられて來朝し、產兒制限を提唱するや、心なき我邦の婦人中には、將來に盲目なるがため、大に共鳴して太鼓を叩き廻り、講演行脚の提燈持をなすものさえあつた、危いことであつた、うつかりすればローマの故事や、フランスの轍を踏み、さなぎだに出產率の低下せんとする趨勢に拍車をかける心配があつたが、幸に俚耳は之に傾くことがなかつた。

又近頃婦人に煙草を喫しさせやうとする惡き流行、けしからぬ宣傳が行はれてゐるやうである。

婦人の喫煙は、その體質を低下し、或人は姙孕率にも影響することを心配するものさえある、積毒の深き感作を怖るるのである、古語に「積羽もよく舟を沈める」といふことがある、かくして我が大和民族の量のみならず、質までも、低落せしむる虞があるのである。

南方に北方に、共榮圈の擴大せられて、その指導にも、開發にも、益々人的資源の數と質とを要する秋に方り、この傾向のあるのは戒めなければならぬと思ふ。

シーザーはローマ帝國の滅びたのは人間が足りなくなつたために亡びたといふておる。

現に車中に、劇場に、家庭に、喫煙する女は增加してゐるやうである、慨かはしいことである。

謀略と云ふことは、一寸と思ひがけもないやうな事にまで及んでゐるものであ

る、殊に目前の事よりも、遠き將來に影響を及ぼすことほど謀略の乘すべきものである。この煙草の一例の如きも、考えれば知らず〳〵の間に、敵の謀略に陷り易いことになる。

其の他頽廢的な歌謠や、小說や、映畵や、又た一寸と聞けば感傷的であるが、よく味ふと厭戰思想を喚び起すやうなものなどを流布せしめることも、思想的の謀略である。

武力戰では到底勝ちめのない英米は、必ずやその得意とする思想戰を以て白人崇拜と、舶來憧憬の餘燼を煽つて、じり〳〵と我に損害を與ふることに努めるのであろふ。

相互は何氣なき行爲が、存外波及するところの大なるものがあることに省慮して、うか〳〵と敵の謀略にかゝつてはならぬ。

防喋は、口から出る言葉に注意するばかりでなく、口から入るものにも氣を配らねばならぬ。

附記

過ぐる歐洲第一次大戰のとき、戰鬪には勝ちながら獨逸の嘗めた辛い苦難は、之を四期に分つことができる、即ち初めは緊張期であり、次で忍苦期を經て、弛緩期がやつて來、遂に崩潰期に陷つた。

みな英米の宣傳謀略にかゝつたのだ、前岸の火災視してはならぬ、戒心を要する。

四二、贅澤

南洋の戰場で、ある時、船が沈沒して、同じ情況の下に、同じ時間漂流した、白人と、馬來人と、支那人が救助せられた、そのとき、白人は起ち上る氣力も

失せて疲憊してゐたが、馬來人は辛ふじて起き上りたるのに、支那人は普通の動作を能く營み得る體力を維持してゐたとのことである。（平出海軍大佐談）

意義のある對照の事實である、吾等は深く之を思索し、能く之を檢討せねばならぬ。

勿論、そのときの人の個性に因ることではあろふが、又人種的の耐難試驗ともみるべきである、人種といふよりも、寧ろ日常の生活の反映であり、體力と共に精神力の試練でもある。

贅澤に慣れたものほど體力は弱いことを知らねばならぬ、贅澤は人を弱化するものである、同じ漢人でも白米を主食とする中南支の人は、麥を主食とする北支の人より身体が倭小である。

吾等は決して贅澤に流れてはならぬ。

贅澤は布帛を染めるやうなものである、染めるに隨つて其の色の益々濃くなると同時に、其の生地は弱まつて行くのである、そして一度染めた布は素の白地にはかえらない。

吾等はいつも又いつまでも質實で、清く、白く、強くあらねばならぬ。

四三、競技

香港攻略のとき、干滿の差がはげしく潮流の急な九龍香港間、最短水路の鯉門水道（約一吉米）を渡るがため、數隊の決死游泳隊を編成して、平泳の世界的名手たる小池禮三、伊藤三郎の兩少尉が教官として指導し、機雷原を泳ぎながら排除すると共に「トーチカ」に突入する訓練をした記事を讀んだ。

又四月十八日米機が帝都を空襲した時、某大學生は夜間千駄ヶ谷の自宅から、指定せられた丸の內の消防署まで全行程を殆んど駈足にて急いでその部署に就

いたといふことも聞いた。

「スポーツは戰場に通ず」と云ふ人があるが、是非とも通せしめなければならぬ、かくてこそ「スポーツ」も意義があると思ふ、競技ではない、遊戲ではない、實用でなければならぬ、實用即ち奉公に叶ふやうに「スポーツ」が指導せられねばならぬ。

ゴルフのステツキや野球のバットのことには明るいが、銃のことや、太刀のことに無關心であるやうなのは適當でない。

皇國の「スポーツ」は忠誠の念に發する臣道實踐の一部であらねばならぬ。

附記

古來我が武道は練磨を主として勝負を念頭におかなかつたものである、正しく強く養はれ鍛はれたものは必ず勝つものである、盲ら試合や、較へ矢などは志あるものはせなかつた、一朝君國に事あるときに用ふるばかりで

あつた、勝負を念頭におくと心がいやしくなるのを戒めたのであつた、今は即ち然らず、噫々。

又由來競技は陸上が主で海上が從の感があつた、大陸にて行はれてゐる野球のやうなたぐひの遊戲が白人かぶれして盛に流行し、施設にも莫大の費用をかけてゐるに拘らず、海國の日本として海上の遊戲や訓練の振はなかつたことは信に遺憾である、偶々「國民皆泳」の如き企もあるが練習は多くはプールで行はれてゐる、プールは基本練習には恰好であるかも知れぬが、畢竟するに靜的の訓練である、河や海で練習するのは動的の訓練である、游泳の術と共に勇壯なる氣を養ふのは、浪に鍛えなければならぬ、海水浴や、激流の鍛練は、この精神的の效果を狙つたものである。

又漕艇の練習も、纖長な舟にて、川や湖でなすよりも、耐波性の舟を操つて海上を選ぶべきではあるまいか、皇國は海國であることを忘れてはなら

ぬ。

更に時代は空での訓練、即ち航空機への親しみと訓練が要請せられて來た。練習には、不慮の過ちのないやうに努めねばならぬが、訓練に方つては犧牲を恐れてはならぬ。

訓練といふことは、技（ワザ）の練磨と共に意志の鍛練である、意志の鉗鎚を等閑（ナホザリ）にして放埒に只遊戯本位で指導しては、それは訓練にはならない、堅忍持久の氣力と體力とを鍛えあげ、造り出すのが訓練である、意志を鍛えなければ人格は養はれない、シツカリした人間は出來上らない。

大東亞共榮圏の建設には、大空を翔り萬里の波濤を開拓する要がある、狹い局地で單に得點數を爭てゐる時代ではない、國策に順應して空中海上の訓練の、今一層熾ならんことを望むものである。

四四、享　樂

ウエイキ島は費用にかまわず六ヶ月前から諸施設をやつておつたが、何を眞先にやつたかといふと、彼等自身の生活施設、享樂設備であつて、防備は全部完了せず、諸材料は積だまゝであつたといふことである、厚生施設を先にして砲臺の構築を後廻しにしてあるところは、アメリカ式である、かくて我海軍に一擊の下に攻略せられてしまつた。

又セブ島占領後、戡定と、複舊の作業に卒先汗みどろになつて努力する海軍士官を見て、比島人は「あなた方は享樂を忘れたか」と問ふたとのことである、嘗てこの島にゐた米國の軍人や、役人らが、毎夜のやうに、あらゆる邪惡なる桃色遊びを展開してゐたことを、土人はよく知つてゐるからである、あまり眞

面目な日本軍人の行跡を、不思議に感じたのである。

又コレヒドール要塞陥落のときに、敵側の紙屑の中から、主將マッカアサーが米軍の將兵の安樂を求めることを警めた訓令が見出された、その文に「兵員は一般に疲勞し、慰安を必要とすること大なりとの報告は、屢々受けて甚だ不愉快なり」と。

又濠洲メルボルンでは派遣せられた米軍將兵の女色を貪ることが横暴を極め、濠洲官憲は深夜及び早朝に於ける婦人の外出を禁止したとのことである。

自由を望み享樂を趁ふ米兵と、家を懐はず、我身を忘れて殉忠の一念に燃ゆる皇軍の將士とは、その人生觀に於て霄壤のちがいがある。

人は生活を豊にすれば必ず「生への執着」を增すものである、古から「田あれば田を憂ひ、宅あれば宅を憂ふ」といふ言葉がある、ものを多く持てば持つほど心配事は多くなるのである、樂み事が多ければ多いほど、命が惜しくなるの

である。

米兵は樂まんがためにその身を勞してゐる、挨拶にも are you enjoy と云ふ、皇軍の將士はよき死處を得んが爲めに心を盡してゐる、一度び干戈を執て生死關頭に相對せんか、その勝敗は自から知るべきである、皇軍の連戰連勝は蓋し故なきにあらずだ。

相互は省みて享樂に心を傾けてゐはしないか、近頃慰安とか、趣味とか云ふて娯樂を人に强ふる傾はないか、今は皇國興廢の岐れに臨んでゐる眞劍な大切な時局である。

吾等は、日常銘々の職務に、興味を覺えて、相互に眞劍に勵みあふ時であると思ふ、心を他に散らしてはならぬ。

「仕事を道樂のやう」に感じなければいけない、明けても暮れても只仕事々々と進まねばならぬ、かく思ふとき心に隙がなくて仕事は健康を增進するもので

ある、厭や〳〵するときは必ず健康を害する、面白く感じてすれば自から力も出でて氣分も爽になる。

享樂には浪費が伴ふ、勤勞には求めずして良き報ひが待ておる。

享樂には弛緩が伴ふ、勤勞には緊張が加はる。

享樂は動もすれば健康を損ふ、勤勞は健康を增進する。

享樂は敗退を招き、勤勞は勝利を呼ぶ。

演劇や映畫や浪曲などは娛樂でもあるが、教養の資料でもある、過ぐる日露戰の戰場美譚は、「演劇が社會教育として大なる貢獻をした」と云ふた人があつた、然るに今猶ほ之等に取材されるものに博徒や、浮浪人や、破落戶（ゴロッキ）が登場し、個々の小さき感情に因る鬪爭や、殺傷沙汰の演ぜられるのは殘念である。導法精神が高唱せられ、防犯週間の設けある今日情けない陋習惰性である。

精神の糧は他の健全なる方面にいくらでもある、當局も斷然之を禁歇し、業者も反省し自肅し、清新な娛樂を社會に送るべきである、一般の人々もこんな國法に悖つた屑々たるものに耳目を傾てはならぬ。

四五、科學化

近頃軍事、產業の要求から科學の振興が推奬されてゐる、「科學する」といふことが流行してゐる。

科學の振興には、研究機關の擴充、科學者の優遇なども必要であるが、科學が生活化せられ、日常化する如く普及徹底することが、先づ大切だと思ふ。

獨逸國は、科學の普及に努力を拂て來たが、餘り教育のない人でも、家庭にラヂオに故障が起れば專門家を煩さず於て、電燈の故障は直ちに自から直し、ラヂオに之を複舊し、自動車を自からよく運轉するばかりでなく、その故障をもよく

發見修理する、又偶々競技などによつて脚の骨折などを起しても、醫者も及ばぬほど巧みに整複して副木を合理的に貼布することを知つてゐる、又榮養や育兒についても學理的によく心得てゐるばかりでなく其實行も合理的である。

我國の中學校を終つた青年や、女學校を終へた主婦にこのことができるか、どうか、學校の物理や衞生學は實際に間に合うやうに教えられてゐるかどうか。

又生活の科學化といふことは、無駄のないやうに合理的に萬事を處理することである。

然るに、ともすると、たゞ科學を私生活の利便と、充實とのみに利用しやうとする傾がある、すぐそこまで行くのに自動車を用ひたり、電車に乘つたりして自己の脚力を國家のために養ておくといふ觀念に乏しい。

また運動不足でありながら身躰を鍛練せようともせず、酵母菌の消化劑などを買求めてみだりに服用したり、やれ轉地だとか、溫泉だとか安逸を貪ることを

文化と心得てゐる不心得ものも少くなく、また文化と文弱とをはきちがえてゐるものも多いやうである。

人はいかに文化的に精練せられても、消費のみを知つて勞作を厭ふ遊惰なものは、その體力が弱くなるばかりでなく、その意志も亦た薄弱になつてくるものである、纖弱なる體格や、薄弱なる精神のものは困苦缺乏に堪ふることができない、難に臨んでは之を避けるやうになる、自己の面目を失つても逃げるやうになる、かくしてその民族は衰亡の一途を辿るのである。

又科學には國境なしと云ふものがあるが科學者には自づから國境があるとフランスのパスツールも云つてゐる、蘭印を攻略せし今村中將の談に「ジャバの複舊建設は、快スピートに進でゐる、オランダ人の技師は、狂喜してゐるが、彼等は祖國の興亡に生きるものでなく、學者として、技師として活きることに幸福を感じてゐる」と、こうゆう情けない科學者は望ましくない、かくあつては

ならない。

又文化は動もすると生活を複雜にするものであつて、從て生活費が膨脹して消費が生產を超ゆるやうになつて來る、その結果は、その時代の社會に不良なる影響を及さずには休まない。

今や大東亞共榮圈の建設によつて萬般に亘り物資に「餘裕」ができて來ると之を期待して人もあるが、たとひ「ゆとり」ができても、直ちに各人が個人生活の安易化や、快適化に向けるやうに考えてはならぬ。

「ゆとり」は尊き犧牲によつてかち獲たものであるから先づ軍備の充實、國力增强のために產業や、交通や、厚生施設の改善のやうな公的方面に振り向けられねばならぬ。

徒らに自利を漁らんとするが如き不心得を起してはならぬ、無駄に消費せんとするが如き不所存があつてはならぬ。

大戰の意義と目的とを克く認識し自省して、文化の美名の下に科學を濫用してはならぬ、惡用してはならぬ。

四六、旅行

修學旅行の男女學生が、旅舘の丹前を着て夜の街を徘徊してゐるのを見るのは殘念である。

本人も、指導者も、無意識の態であるが、然し國家の重大時局に方つて次代の國家の運命を負つて立つべきものゝ姿として適當であろふか。

抑々丹前は古來浮浪人の衣服であつて士人の衣服ではない、堅氣の家庭には見ることのできない衣服である。

學校の科程は、卒業後の活動の準備と用意との爲であつて、刻下の先務として

は社會的調整の習性を善導することが肝要ではあるまいか、この意味に於て社會教育の一局面として旅館の施設と、旅行者の心構が問題となる。

旅館を治外法權の別天地と考えず、家庭の延長と思ふべきである、家庭に於てなされざる事が、旅館で演ぜられてはならない。

又鄉閭で隣組の間に於て自己の體面を重んずる美風は、特に旅に於ては一層嚴肅でなければならぬ、「旅の恥はかき捨て」でなくしてお里の恥辱であり、お國の恥辱でもある、旅に於ては各個人が學校の代表でもあり、その生長地の代表でもある。

修學旅行は修養の旅行でなくてはならぬ、遊覽的に終始させてはならぬ、時々刻々、事々物々、處々みな修練でなければならぬ。

又修學旅行團と偶々（タマタマ）旅館を同ふしたる他の旅客は、言行をつゝしんで苟も適當でないこと、人に迷惑を及ぼす如き行爲を、同宿の學生の耳目に觸れしめてはならぬ、學生は我等の同胞である、他人では決してない、將來我等のあとを引受けてくれる後繼者であると思ふて、附添の先生はかしに責務を負はせず、緣あつて一樹の蔭に宿つたものは、皆で學生を立派にするやうに心懸たいものと思ふ。

大東亞戰は、次代國民の育成に期待するところが甚だ大であるからである。

附記

イギリスでは乘物の混雜を避くるがために、Vacation at home（家庭で休養）を、ラヂオや新聞紙にて勸奬してゐる、アメリカでも亦た乘物の不自由から Holiday at home が唱導されてゐるやうである。

皇國も陸上運輸の强化萬全を期するがため「足の肅正」といふ言葉が用ゐられてゐるが、之れは外出を强いて歇止する意味ではないと思ふ、不急不用の外出や旅行を差控えて、乘物の濫用を避けよといふことであろふ、畢竟、「乘物の節用」であり、「乘物の肅正」である、近頃の靑少年は、あ

まりにも乘物を利用し過ぎる傾がある、昔の人はよく歩いたものだ、歩くのは何より良き自然の鍛練でり又他に依賴せざる自主的精神の涵養にもなる、公道を、將たまた山野を濶歩するのに誰も止めるものはない、我が欲する所へ、我が欲する速度を以て、我が欲する時間だけ、歩けばよいのである、こんな愉快なことはない、「休日の足」は乘物に托してはならぬ、堂々と歩いて、心身を　大君のために培ひ養ておかねばならぬ。

獨逸では、各驛々に「車輛は勝利のために回轉しなければならぬ」といふ標語が掲げられて、無用の旅行や、遊樂の足を戒め國民の自肅を促してゐるとのことである、皇國の汽車も勝利の爲に動かさねばならぬ。

四七、牝　鷄

書經に曰く「牝鷄晨（アシタ）すること無し、牝鷄の晨するは家の索（ミダレ）なり」と、皇國にては「牝鷄うたへば家滅ぶ」とも諺し、牝鷄のすゝめて牡鷄が時を告ぐることや、牝鷄につゝかれて時をうたふことは、その家の爲でない、牝鷄の出しやばるのは吉ではないと云ふ戒です、又女賢ふして牛を賣り損ふといふこともあります、たゞに牛を賣損ふのみならず義理を損じ禍を招くことがある。

然るに儒教の起りし本家本元の支那にては現に蔣介石の夫人宋美齡は、やゝうたい過ぎてゐる、內助でなくて外助までに及び、日支事變を複雜化し、戰局を擴大し、戰期を延長して己が邦の民生を塗炭の苦に陷れ、國勢をさえ危殆に導いた、女賢ふして國家を損するものである。

又詩經に「哲婦は城を傾く、婦の長舌あるは維れ厲（ミダレ）の階なり」といふておる、傾城の起りである、女人の發才を戒めたものである。

亦た米國にては、女だてらに政治問題に容喙して大戰に米國を卷き込みしルー

ズヴエルト大統領夫人に對する反感は、漸く熾烈を極めてゐるやうである。

五月二十七日ニューヨーク洲に於ける前大戰歸還郷軍團大會の席上シエーコブアーク中佐は左の如き痛烈な攻撃を述べてゐる。

「米國が今次大戰に卷き込まれたのはエリノア・ルーズヴエルトの責任大なるものがある、吾々は飽くまで彼女に反對しなければならぬ、若し當局がルーズヴエルト一家の見當外れの豫言に耳を藉すことなく、吾々郷軍の忠言を聽いてゐたならば事態は迢かに好轉してゐたのであろふ、自分はエリノア・ルーズヴエルトに直言する、貴女が理解し得ない事柄に關しては一切干渉がましいことは休めていたゞきたい」と。

東にルーズヴエルト夫人あり、西に蔣介石夫人あり、好一對の牝鷄である。

沈定川と云ふ學者は「學者の工夫は當に閨門より始むべし」と戒めてゐる。

牝鷄はうたつてはならぬ、又牝鷄をしてうたわしめてはならぬ。

これが家を齋え、家め治め、果ては國を護るゆえんである。

又牝鷄には牝鷄のつとめがある、暮を告ぐるのは牡鷄のつとめである、ある意味にて之はまた職域奉公の戒でもある。

四八、尾生と蛙

尾生は橋の下で約した待人を待てゐた、水はすでに瓜先をひたしてゐるが、上潮になつたならば、必ず來ると云ふ女は、いまだに來ない、暮靄はやう〳〵立ちこめて、潮はみちて足から脛、脛から膝、膝から腰、腰から胸と水に浸て行くのに、尾生は必ず來る筈の女を信じきつて動かなかつた、尾生は竟に水にのまれた、しかし約せし女は遂に來なかつた、かれが骸となつても、來るはずの女は來なかつた。

西暦一九三九年このかた、世界を見渡して私は多くの尾生を見出した、眞先にポーランド次でオランダ、ベルギー、ノルウエーに、ユーゴー、ギリシヤに蘭印に、濠洲も重慶も亦た然らんとす、然し是等諸國を通じて「女」は常に大英帝國である、古來いはゆる騎士道、紳士道を重んずるといふ英國である。

又ギリシヤのアイソーポスの寓話に、ある時、蝮蛇が泉へ行つて水を飲まうとすると、そこの水蛇が怒つて爭闘が始まつた、蛙は水蛇と仲が善くないから蝮蛇に助太刀を約束して激勵した、然るに戰が始まると、蛙はたゞ鳴てゐるばかしであつた、戰が終つて蝮蛇が蛙に、加勢もせずに歌ばかし唄つてゐるのを非難すると、蛙は私の助太刀といふのは手によつてゞはなく、たゞ聲によつてなされるだけだ」といふた。

英國はまた蛙聲でもあつた。

北アフリカ戰場にてトブルクで一番馬鹿を見たのはド、ゴール軍で、彼等は英軍のあまりにも狡猾な仕打ちに、ひどく憤慨してゐる。

又同戰場で、前に樞軸軍の猛攻に七ヶ月も耐へ拔いたのは、ポーランド軍が働いたことが大きな原因をなしてゐたが、ポーランド軍は英軍に愛想をつかしてソ聯軍を援助するため東部戰線に向てしまつた。

そのあとで英軍は數ヶ月を支へる物資を持ち、兵力も十分でありながら、僅か一日にてトブルクは陷つてしまつた。

珊瑚海々戰で擊沈せられた米航空母艦「サラトガ」乘組の海軍士官が辛ふじて濠洲に辿りつき、あるインド新聞記者に左の如く語つた。

「英國は今度もまた傳統的な例の遣り方即ち協力者の犧牲によつて保身しやうとしてゐる、米國が今のまゝ愚かな誠意を持ち續けるならば、第二の蔣介石、第二の蘭印となり終る危險が感じられるから、自分はルーズヴエルトの主戰論の納得できないことを米國の輿論に訴へたいと思ふ」と。